

扶桑皇統記圖會
前編
三

遠
2505
13-3



遠
2505
19-3

扶桑皇統記圖會前編卷之三目錄

吉備公讀野馬臺詩 長谷觀音利益の條

吉備公野馬臺の詩と讀みの圖

和笈初瀬觀音由來 佛坐巖出現の事

安祿山謀害吉備公 仲麿靈救吉備公危急條

近江の湖水へ灵木流き來るの圖

隆昌女思ふ因て吉備公を救ふ圖

皇統記圖會前編卷之三

王津島明神勸請

長屋王諷死

大伴小夷乞巧と成て漆部君足を討圖

聖武帝光明子宮御幸

舍人親王薨去

僧元助乱宮内廣嗣謀叛

元助筑紫お至り廣嗣が靈不遭命を隕と圖

衣通姫人啓傳

大伴小夷復主仇事

吉備大臣与廣成歸朝

始痘瘡流行事

廣嗣憤靈殺女助條

目錄終

扶桑皇統記圖會前編卷之三

浪華 好華堂野亭參考

吉備公讀野馬堂詩

長谷觀音利益之條

吉備大臣八仲九の七靈の助に依ていすは倭國の傳々する其の勝負を競を
 然も唐土四百余州弟の高手と呼まはるる玄東お勝れ多きども隆昌女が石
 を吞隠せし由に對其を成て勝負分るる宮中退れ鴻臚館へ歸りて終日の
 疲労を休められざる小其夜又仲九の靈を現して吉備公小回て曰今日宮中
 小於て其の争ひ小きくも唐土隨一の名人と稱せられ玄東おれも我劫通力を以
 貴卿お勝とせ進せし所を玄東が妻貴卿の得石を盗と吞隠せし由に地基
 となりたり何由お彼女が乳明し石を吞隠せし義と白状させ貴卿の勝お定め
 るおまやと問をれば吉備公答て賊お公の助力に依て難中の難なる其の争



小勝とて得日本の耻此身の耻を免れ吞けおき礼謝討小尽くは但女
其石を盗み吞隠せし我我もちと見上公の告小て弥これを知り不彼女を云
東が妻とい知れども其石を始る最初より心を凝と見る深た巨細有る
と思ひし石を吞隠せし及んで借先夜公の物語小せし。玄東の妻たるを
悟まり其時礼明せんよ安んぬも彼夫の肩を厭ひて我得る石を偷隠せし
夫のよ小貞操國のよ忠節を。適きあ列を綴る。然る小我勝と頭ん
とて。彼女を礼明せし。よまきよ無道殘忍の安禄山前後の思慮の及ぶを忽ち
女が腹を断發た。玄東をも連座の刑を行。不仁是より甚く死あ。我
太上天皇仁君なり倭國万民のよあれを後令唐主の人民を害ひて強て曆書と
得て帰れりといよ思食さ。且又唐帝の其よ少勝を秘書と貸与んとあるを
一時の方便小。我を屈し帰る人の戲言なり。これを我其の勝を頭んとし。吏

を左右小寄て容易に貸与す。物を去東夫妻と刑罰せしむる無益の殺生のを
あつと彼女石を偷隠せし卑怯なる我もよ人を知ね公の助言と頼し未だ知
ざる困甚と知息して唐土の名人と呼ばし玄東が眼を圍て勝し女が石を隠せし
より百倍勝り卑怯なり。依て女を鏡小向ひ時安禄山胎内の其石を見せし。小
礼明小及んとせ我我妊娘小言結りて女が危急と救ひ得せし。凡万物皆天の命
小従て去来。敢て人力の及ぶ。抑え正天皇万民の為小日本曆を製せんと思食と
る。是本朝小曆道與る。然れ萌て則ち天の命なり。然れも天道ハ寛恕やく火連小
変成成む。故小公勅命以蒙りて此土渡り。玉兎集と得んと苦学する。更十四年。遂小
其書と写記得て帰朝の船の纜を解とよ。難風是を妨げて再び唐土へ戻れ
し。未だ曆書日本渡る。唐の期の来りたるなり。彼下和が楚山小玉石を据へる。玉世小
出る。明と殺せし。あれもいさ。天の時至る。故二代の王唐是を玉小卵とて漸く

皇紀 卷之三

三代目小至りて玉磨彼石を見て、真の美玉なりとて琢磨す。天下小雙を名玉と成り、則ち天の期をばならん。されば彼玉免集も倭國へ渡るる。天の時無んを有る。古
 結由人曼を練り、天曼を成と縋り、人力の私を以て大速小得んと欲する。使小遣
 て功無乃と然も連天の時小任せ、安閑とて寧く年月を送る。来る。天の時を由
 又失ふ。只誠心を尽す。柵とて雷の心境まを逐小望を以て遣す。下とす。され
 亡雲ももち點首実然かり、何東も天の時の熟もを待小不如。去か。安祿山揚
 國忠ホの使人如何なる。毒針を殺命量。心を以て油断が。去り。あ。結合うち早
 曉の鐘。雲小御音を亡。雲も殺。鳥。休也。再と見。中。夕。と。ひ。夜。消。失。夜。
 仄くと明ふ。斯て吉備公を鴻。盧館。小在。唐帝の消息と待。去。何。乃。使。か。
 かく。程。なく。其。羊。も。春。明。れ。も。唐。の。開。元。二十。一。年。の。春。小。なり。ぬ。され。も。猶。唐。帝。より。何。乃。
 沙汰申なく。只文官張九齡の。倭使使となり。常小旅館。来り。文学儒経の。論。談。

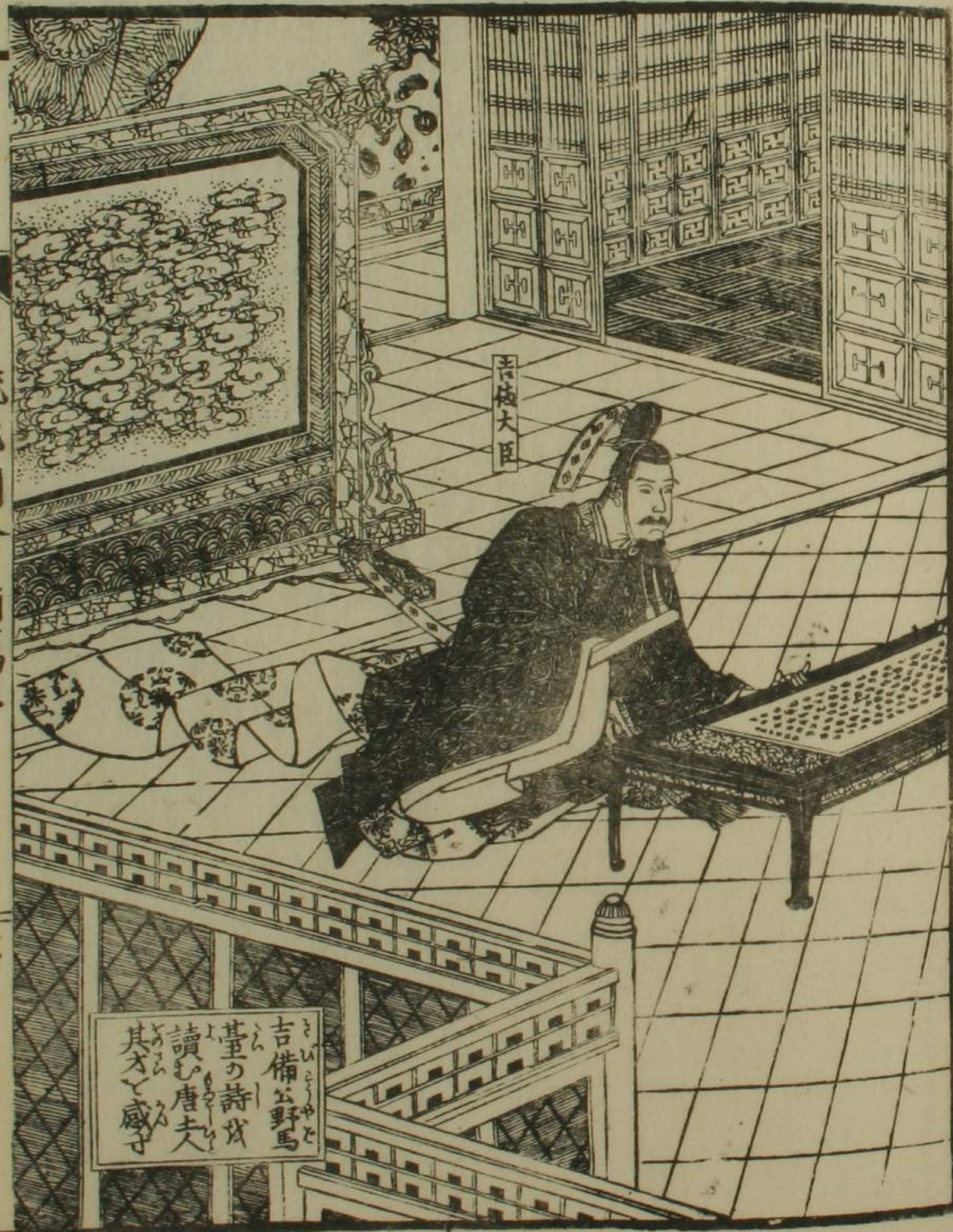
を。く。る。多。の。吉。備。公。素。り。好。む。道。れ。を。九。齡。小。就。て。諸。の。典。藉。を。字。び。太。公。望。呂。尚。子。孫。
 子。を。の。兵。書。を。字。ひ。究。め。ら。れ。る。然。る。小。春。暮。夏。過。秋。も。稍。小。の。天。小。なり。頃。
 吉。備。公。旅。館。の。障。子。を。開。て。隈。な。れ。月。を。か。め。仲。九。が。天。の。原。の。詠。歌。と。思。ひ。出。し。其。
 名。志。を。遂。む。と。異。國。の。王。小。能。なる。成。哀。と。不。覺。符。衣。の。袖。を。沾。され。折。り。秋。風。
 颯。と。吹。来。り。月。朦。朧。と。曇。り。て。何。と。な。り。凄。然。時。も。あ。れ。仲。九。の。亡。靈。也。現。出。如何。や。
 吉。備。公。長。旅。館。の。滞。留。を。待。む。り。人。昨。鳥。唐。帝。の。宮。中。小。評。議。有。り。其。
 始。末。と。告。進。せ。ら。れ。見。奉。入。り。たり。諸。も。唐。帝。日。本。王。の。親。至。默。止。を。な。れ。彼。秘。言。
 を。倭。國。の。使。者。小。賞。与。ふ。と。仰。え。ら。れ。安。祿。山。揚。國。忠。ホ。先。小。田。基。と。あ。せ。て。公。下。耻。辱。
 我。子。ん。と。巧。と。計。相。違。せ。と。腹。黒。小。思。ひ。唐。帝。と。種。小。中。惑。り。今。一。度。難。回。を。あ。つ。て。
 當。或。ま。せ。ん。明。目。公。然。宮。中。招。き。ま。休。國。傳。ら。る。書。籍。と。續。し。耻。を。与。ん。と。巧。り。
 我。れ。も。貴。卿。乃。博。才。を。以。て。書。畫。を。續。る。人。更。ハ。最。易。ら。れ。も。一。箇。の。難。更。あ。り。其。故。ハ。

唐帝の宝藏小野馬基の詩と書あり。つづ五言十二韻めて二百二十字あれども其点の及り終横小乱まで。何ぞの文字より續始め何れの文字より續終まで。此詩は昔後漢の代に宝結和尚と号する道徳高九僧俗塵を避て或深山へ入菴して修行し居りて在る。何國よりともあつて入の童女来りて菴の壁に一字と書りて去其翌日又別の童女二人来り。はく壁に一字と書添て去如此する。吏連日不止。百二十日百二十人の童女来り。来り百二十字と題す。宝結和尚小告て曰。此詩は是大日本の織文なり。你字を取て後世傳よ。後年自然と續者有る。と言終り。行方あつて去。宝結和尚奇異の思成たり。教の如く書寫して世傳。倭の國の織文といふを以野馬基の詩と号す。但野馬基は野馬基といふ義あり。右の詩世傳れども如何なる博学の儒者文人も曾て續入たり。代々傳りて今唐帝の什物となり。宝庫に秘置され。貴卿諸乃書

藉を滞りたり。續得れども彼野馬基の詩を出し。能續下し。か玉免集を貸ん。續得ども秘書と貸しと言ぬ。彼詩は入作小あまを。化佛の作る織文あれ。常小四天王守護まの。我亦如き。幽冥の陰鬼近者。吏能は。彼詩の。我劫通力も續得。貴卿丹誠を疑して神佛を祈り。其護護の力も借り。續りと言終り。次女は霧煙の。消失する。吉備公大糸。孩られ。夜令日本へ渡り。書籍なりとも。並書連の書も。續得ん。吏難うられ。とも古より博識の儒者も續り者なり。劫通自在の仲丸の。不續。吏能ハ。難持。凡眼の我争り。續得んや。若續。言と言。曆書は。貸す。是を。我一生懸命の。天変なり。噫。是は。如何と。言。俊才。大星の。吉備公。愚。果て。忙。心。神。我。因。め。られ。思。返。如何。思。慮。を。勞。ると。の。自。力。及。難。此。六。神。佛。の。願。護。の。力。を。借。も。ん。より。他。施。と。言。さ。り。と。

浄衣を着て手洗ひ口漱ぎて達小日本の方小向ひて礼拜仰願ハ大日本八百
 萬神哀愍致垂り彼野馬臺の詩を讀得たり吾大君の需ませの玉
 兎集と得させり烟祈中臣の枝ひを上る吏一千座小及び又年未信仰
 ある和州長谷の觀音を遥拜南無普陀洛山大慈大悲觀世音菩薩
 妙智力戎加の臣が大危難を救せり丹誠を凝て一心祈られり
 因小曰大和國長谷寺の觀音ハ聖武天皇の御建を方縁起次小妻記と
 斯て終夜普門品を讀誦一官觀音大士と祈念あるを夜白と明らる
 然る小果と唐帝より清招の勅使を遣越さるる吉備公衣冠を整て
 華清宮へ結昇り見らる小玄宗帝錦帳の内小出御あり帳外ハ文官武官
 朝衣朝服を整へ魏堂と居並たり吉備公唐帝小拜謁あり役けの
 椅子小掛られる安祿山約を設日本王吾大君の秘書と需らるるが由り

昨年田基の勝負とてち勝とあり秘書と倭國へ貸幣と定めり小勝負と
 され今般々書籍を讀し能讀吏を得られる望る曆書と貸と文と
 上申かり足下能讀るや否やと問られ吉備公答て臣不敏なり玉兎集を
 貸給るものあり試み讀むとせられる安祿山内官小指揮して車乃文
 車と吉備公の前小曳出させる車の上小昭明太子の撰り文撰を首といふ日本
 渡さる珍書のもとと積上り吉備公氣を脩り先文選を把て杖と用れり
 くと讀る吏水の流る如其他儒書醫書佛書おける近一半半も定なく
 讀上る吏のて熟讀せり如ありを小玄宗帝と先とて並居る諸臣其博才を
 感嘆せり者たり安祿山も憫み再官人小掄て七室を鑿ゆる文臺小
 錦の表装せり巻物と載て捧出させ吉備公の前小置りて曰其一卷ハ野馬臺乃持
 と号倭國の織文なりと漢の代より傳れる持かり日本の織文とあれ倭人の讀



皇極經世一圖會之別卷三



皇極經世一圖會之前篇三

五

とんを有らざる書なり。いざ疾續でせられしと望まざるわど吉備公須敬馬と胸うち
強げども色も見えず。水晶軸の二巻を徐に把揚せり。戴きて紐を解得ぬれども
実も仲丸の壺の落りしごとく首尾更不知る。長篇の詩あり其文字六

始定壤天本宗初功元建
終君周技祖興治法主
谷孫走生羽祭成終事衡
填田魚贈翔世代天工翼
孫子勳戈葛百國氏右輔
昌微中干後東海姫司為
白失水寄胡空為遂國喧
龍游審急城土茫茫中鼓

牛食食一人黃赤與丘昔鐘
腸鼠黒代雞流畢竭猿外
丹盡後在三王英稱犬野
水流天命公百雄星一流飛

と書く。五言十二韻百二十字の文字八續ある。何まの文字より續始むるれども知
か。縦不續横不續後より續首。續百般千般思慮を困め肺肝を確けども。更不訓
下らふれを全身汗を漫り。心中小日本大の神祇を初と。殊更長谷寺の觀音菩薩を
深く祈念し。万望此詩を續得ざる。當座の耻辱を救せんと。心小渴仰有るる
奇あるを忍坐と空中より。小細多。五彩の錦下りて東の字の上。少時。雨りしれより
海の字姫の字と漸く。這りしる小。其跡。金色の糸と。文の順次句續まで。明小
入るる。吉備公念中の喜悅。譬る小物なり。是は天神地祇の應護。且と長谷の觀音

大士の御利益を仰ぐと信心肝銘。月夜放まを蛇の糸筋お就て續き多る小紫並
とて詩の意隈か解し。然も命を蛇を足る更か。安禄山吉備公の猶豫
ある成て。是詩を續得ざるあも。独笑。如何や疾續せされむと急ま言
備公亮平と抄笑さ。續上りん能まのて。高声續上らる。其詩小曰

野馬臺之詩

東海姫氏國	百世代天工	右司為輔翼	衡主建元功
初興治法事	終成祭祖宗	本枝周天壤	君臣定始終
谷填田孫走	魚膾生羽翔	葛後干戈動	中微子孫昌
白龍游矢水	窘急寄胡城	黃雞代人食	黑鼠食牛腸
丹水流盡後	天命在三公	百王流畢竭	猿犬稱英雄
星流飛野外	鐘鼓喧國中	青丘與赤土	茫茫遂為空

と字句一言之淀。弁舌溜くと懸河の如く。續上られん。玄宗帝と先と
して衆人大お殊れ感。古より博學多才のたまえある鴻儒も。續得ざる。難詩と
只度見て斯易くと續し。人おあ。昨年の棋の手並といひ日本お如何の大
智の人有人も量か。と皆舌と捲て。恐ま。安禄山ハ又此度の心巧も画餅と成
一我無念おかの吉備公お對ひ野馬臺の詩を續得られ。奇特なり。但此
詩ハ先の中り如く倭國の織文か。と言傳ま。詩の意と解得る者有更と
ま。足下後人おれを今續て詩の意成解得られ。おん其織文とハ何を
以てりやと結向吉備公答て。やされ。倭國の織文とあれ。將來の更を今より
ハ知難し。と。初句より四五句まで。過去の義おて思あ。更のハ大略説せ
る。先初句ハ東海姫氏國とある。倭國ハ此唐土より東の海中お有。東海と言
あり。倭日本國初天子と天照皇太神と号し。なりて女帝おて在。成て姫氏乃

國といひあらん。弟百の百世代天ユと百世長久の大敷を以て。百世限るよ
義おあふ。代天ユと八日本天神七代地神五代合て十二代の間を神代と稱し。十三
代神武天皇の御宇より始て人皇の御代と稱さ。され人皇神代の帝祚を受耐か
ひて國を治り。以て天ユ代といひ。弟三句目の右司為輔翼とを神
武天皇の臣下天種子命。天富命。左右輔翼の臣と為て無道の者と伐有道
の者と奉て政を捕り。右司といひて左司と兼し。あん弟百の衡主建元功とを
人皇三十三代用明天皇の皇子聖德太子。衡岳の惠思大師の後身なり。和智を
以て衡主といひ。元功建ると右の聖德太子三十四代の帝推古天皇と浦佐
一横政となりて冠位十二階を定め十七條の憲法を以て治國平天下の基と用ゆ
故小元功を建るといふ。弟五弟六の兩句小初興治法事終成。祭祖宗
といふ。皆太子の功績小中まり。是等の句まで八當今聖武天皇の御治世まで乃

紀小中まり。茲も弟七句より以下の將來の織文なるを前知する。斐能とて
詩句の意を明く。小鏡をなれ。安祿山を言句小結を赤面と一言も。我とる斐
能と。玄宗帝ハ始より吉備公の論弁を居り。其聰明睿智を深く感
ず。ひるる。其の者を臣下となりて政道を佐け。めお。大い小國の益と成りと思
ふ。其の功を知らげて宣ひ。多る。戒公の俊を名弁尋常の者の及ぶ所。あす此六
のそ。玉免集とて。先代よの秘書。只一部有りとあれ。秘書監小
命。字さ。後日本主小献。間寛。追。倭國傳。所乃
孫能。字。其。沈香亭。酒宴。催。吉備公。車。興。應。わ
々る。吉備公。大。喜。悦。あり。酒。與。入。酒。宴。畢。後。厚。帝。思。と。拜。謝。し
辭。を。願。ひ。て。宮。中。を。退。出。鴻。臚。館。へ。倭國の神祇を遙拜あり。取。分。て。長。谷
の。觀。音。の。御。利。益。と。尊。と。深。く。佛。恩。と。謝。し。其。夜。ハ。快。く。枕。を。著。れ。る。

和州初瀬觀音由來 佛座巖出現事

吉備大臣の信仰ある和州長谷寺の觀世音と云ふ聖武天皇の勅願小依り
神龜四年 吉備公の入唐より七年餘に小脚建立あり用基の徳道上人奉行の藤原房前公
佛子、唐土より来朝せし賢父子、芥子園父子、閑眼、行基僧正して佛像、
御丈二丈六尺十二面觀音なり。抑此觀世音の由來と尋ねし小昔近江の湖水
洪水せし夏有る多し何國より流し出らん長六間周り三圍むる乃楠の大木
湖水、流しきりて大津の浦、流れりる由、里人、是を曳揚んとし、小奇
あるうみ楠、小手を掛し者、悉く疫癘を患へ、人、大りおそれ、其、終、小捨
置るる、又、楠、八湖面を東西南北と流し、回りて年月を徑る、小六和國八木の里
小井の廉子と呼る寡婦あり、二親及び夫、亦、死別し、其、追善の爲、佛像一
軀を造らんと志願と起し、然れども、いまだ良材を得ざる所、或人、近江の湖、小

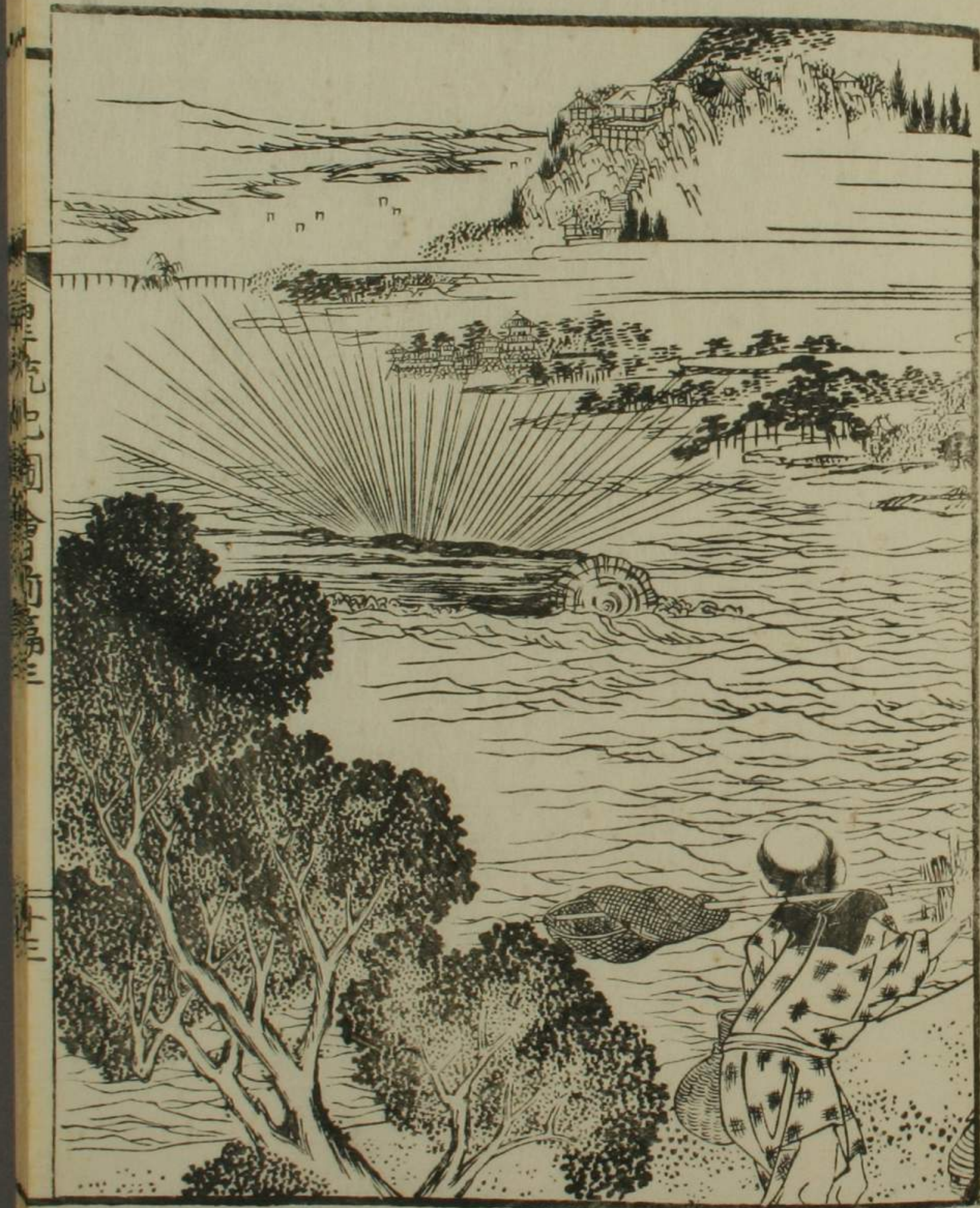
良材、漂ひ流るる、夏を経り、其、を、廉子、悦び、即ち、江州大津へ到り、見、小楠、此
頃、また、大津の浦へ流寄し、折たれ、廉子、是を、見て、里人、小乞、求る、小素、り、忌
怖る、找、未、あれ、乞、小任、せ、多、由、廉子、喜、し、人、歩、を、雇、ひ、古、郷、の、八、木、へ、曳、せ、帰
り、佛師、と、需、め、佛像、小彫、んと、思、ふ、うち、廉子、病、死、し、た、れ、を、楠、八、其、終、廉子、が、家、の
あり、り、小有、る、多、し、是、を取、ん、手、以、掛、る、者、あれ、を、皆、疫、病、を、患、る、由、敢、て、取、ん、と
を、る、者、な、く、又、數、十、年、と、徑、り、然、る、小、一、年、八、木、の、里、小、洪、水、出、て、伴、の、楠、同、國、長、谷
川へ流し、出、る、と、土、人、世、珍、し、れ、良、材、あれ、を、川、より、曳、上、是、を、物、小、用、ひ、ん、と、て、手、と
掛、ま、を、宗、り、成、受、る、夏、以、前、の、如、し、依、て、是、を、恐、れ、注、連、を、張、近、寄、者、な、く、捨
置、る、多、し、數、年、至、て、後、徳、道、上、人、長、谷、来、り、右、の、楠、を、見、て、垣、結、廻、し、注、連、を、張
る、以、異、と、土、人、小、其、故、を、問、く、小、え、近、江、の、湖、水、小、流、れ、八、木、の、廉子、佛、像、小、造
ん、と、て、曳、歸、り、小、廉子、病、死、し、楠、八、洪、水、の、爲、小、長、谷、川、へ、流、れ、出、り、曳、上、て、物、小、用

ひんと手杖掛る者あれむ皆崇り成受るが如し（如し）不垣を結注連を張みかると語り
る小徳道上人にて是靈木なり惜いふ廉子と申す（申す）遂に死せり
更我此杖を以て佛像を造り其女の志願と果さむ（果さむ）我小給てんやとこと
をれむ土人一儀も及むを許さる小上人喜悦あり人歩を憑て長谷山（長谷山）曳
上佛像小造んと欲せども負僧を自力小及む楠の側小草菴と結び且夕
杖を礼拜し万望佛像と造りなる力と助大檀那を得さるめんと祈念ある更
三年小及びる藤原房前公（藤原房前公）一日狩獵の為長谷山へ入ると二人
の僧杖木の前小坐して袖小礼拜して居る小不審小思れ互寄て其故と問は
る小徳道上人楠杖の末由を語り佛像小彫んと欲せれも自力小及む大
檀那と得ん如し小多幸祈りかると答られる房前公深く感心あり（感心あり）実奇特
なる志心く當今六佛法を御信仰せませむ我既洛の上君（上君）奏聞し佛像と彫

る力を助く仰せ上人（上人）大歡喜あり拜謝して頼まれり房前公帰
洛ありて後参内して右の由を奏聞小及むる小帝も兼て觀音の佛像と造らむ
と思召さる折々ある也（也）唐感（唐感）其頃名佛師と世小稱する賢父子（賢父子）芥子園又
子小命（命）の彼楠杖にて二丈六尺の土面觀音の像と彫（彫）まめ賢父子（賢父子）又子勅
命と奉り長谷山小到りて二人丹絨を凝（凝）遂小楠杖を以て觀音の天像と彫（彫）畢る
が二丈六尺の大像あれ堂座（堂座）何を以て造るを（を）又子高儀といふと決せる所り
其夜一山大（山）鳴動（鳴動）緒人甚（緒人）發死（發死）是ハ何ある（何ある）変更（変更）やと恐怖（恐怖）多所明（多所明）小
よく震動止る是小依て夜明て山登り（山登り）夜の中ハ尺（尺）四方の岩出現（岩出現）上面
平くありて佛足を載る所有る小徳道上人（徳道上人）賢父子（賢父子）父子（父子）奇異の思と
かり是緒天の加護（緒天の加護）の所かりと歡喜踊躍（歡喜踊躍）岩の根と深く堀穿（堀穿）る小更小底と
あると実小天力の為所ありて人巧（人巧）の及ぶ所ありと感嘆して止む則ち其岩の上小佛

像と載するふ殆ど此佛像の爲に別小造成る如く、或は不思議とのも猶余りあり、
 斯て観音の靈像成就せし旨奏聞し、則ち藤原房前公と奉行し、堂宇を建
 立せしむ。造管畢りて初瀬寺と寺号と下され、行基僧正小用眼させ、の帝群臣
 戎徒て御参詣せし。多く乃金銀米錢を御寄附あり、又數多の賤帛と僧俗
 施し賑へのひたり。是より貴とて賤とて皆初瀬寺へ奉納し、諸の願と祈りま
 利益の炳然とて御音の物小應むる如く、願とて叶ふる事なり。是亦依て日夜奉詣り、
 絶間なく、山川數百里と隔り、遠國より皆歩きたり運びたる。されど吉備大臣由此觀音
 薩無を常小信仰ありて公勢の違ある毎歩も成運むるが果して今度大利益と
 蒙り身の蒼と國の蒼れと異國小残されたる。信あり得有と、是亦の更と續あり、
 因小曰賢文子芥子國又子唐土の産あり日本へ渡りて緒寺の佛像を彫り、
 其作至妙なり、皆靈驗ある。今の京都誓願寺の本尊阿彌陀佛由賢文子

芥子國の作なり曾て一佛と又子所を異し、半身つ彫り持寄て合せ、
 一分の合する所なり。一人と刻る如く、ありければ、諸人其絶妙を感嘆し、
 此本尊中頗る靈驗有るゆ、惜み弘化二年正月廿日火災ふりて焼亡なり、
 安祿山謀害吉備公 仲九靈救吉備公危急條
 却て鏡玄宗皇帝ハ吉備公の俊才を愛し、如何も一誓士小留めて臣下小爲んとの
 と。翌日鴻臚館使者とまき、吉備公と眞慶宮へ召し酒宴と給ふ。又種々の珍異と
 与へられ、宮中へ御留りて三日小宴を同れ、五日小大宴と催りて、御食應へ、或は諸般の
 藝術小堪能なる者と召寄られて、吉備公小習字を、のめり、の偏小其心を懐け
 臣下と爲んと計られ、吉備公ハ眞宴珍宝由望む、只玉免集と得て、一日も
 早く帰朝せむ、度々玉免集思借の義を願われ、帝ハ層書とよむ。集
 日本へ歸るを、と思召吏を左右小寄て、時且延され、吉備公心あり、唐



皇
徳
記
巻
之
三

土小足を画むる更又三年おど及び其間書典書法軍学。劍法緒の遊藝
 小いる迄悉く学び究められり。時小本朝にて下道吉備入唐してより已未四年の春
 秋を歴しといふ。帰朝せられ太上天皇待しむるに御赤内ありて當今
 不むらせむ。先年入唐させ安部仲丸其生死定らざるに於て再び下道吉備
 を彼國へ渡らせし。是より四年及ぶと何の消息もなせし。陛下群臣の中より
 秀者の者之擇出し遣唐使とて渡唐させ仲丸吉備が安否を問はせむと宣
 する。王上謹んで奉りし。舍人親王と御評議の上多治比真人廣成を以て
 遣唐大使と。從五位下中臣朝臣名代を副使と。判官録事各其器當り人
 を擇む。いふ。多々の聘物を齎して入唐せし。此人勅命を奉り天平六年申戌の正
 月上旬小平城の都に幾足。下旬肥前國唐津より乗船。覽を解く大海へ乗出
 するが海上無かり。三年三月下旬明州の港に着船し。これより船を下り長安の都

小い鴻芦館へ入て休息。多し。此時吉備公唐帝の君に依て宮中へ居られり。遣
 唐使者館せし由とて大い悦び唐帝小御暇を願ひ鴻芦館に到り。廣成名代以
 下小對面ありて互小無事を賀し悦び合。更限り。さて廣成吉備公小向貴卿入
 唐せし。より已未四年と歴し。尚歸朝せし。由。當今太上天皇より大い待しむるに
 彼玉免集は。いふ。得られむ。や仲丸の生死の程も。覺束と。向られ。吉備公。各。其。就
 て長物結あり。如斯くあり。始仲丸の靈鬼の物語。幽基の勝負野馬。其の詩を
 續一。條。初瀬の觀音の御利益の更。まで。一。五。十。次。結。れ。る。ま。ま。廣成。より。座。の。人
 く。一。度。ハ。孩。れ。度。ハ。感。じ。又。ハ。仲。丸。が。憤。死。と。哀。れ。を。な。す。吉備公。又。廣成。小。向。ひ。さ。る。ハ
 玄宗帝。已未。彼玉免集。と。日本王。贈。る。む。と。許。容。有。さ。る。更。と。左。右。小。守。時
 日。と。延。酒。宴。遊。樂。を。以。て。我。を。今。日。まで。抑。留。せ。ら。る。ハ。我。心。を。懷。て。此。國。の。臣。と。為。ん
 為。な。さ。下。彼。仲。丸。玉。免。集。と。字。取。ん。さ。る。後。小。唐。朝。の。仕。人。れ。も。我。豈。此。國。の。苗。を

久や。貴卿唐帝小謁せんむ。玉免集とて我も歸朝を許さる。すうふや
 のるる。と頼まれんむ。廣成承緒。猶万吏を平令。兩日休息して。三
 日。小廣成名代判官録。吏吉備公。内伴。聘物を從者小昇持せ。王宮
 内。玄宗帝小拜謁して。日本天子の勅書を捧げ。禮物を獻じて。唐朝乃
 大平無敵と祝賀せんむ。玄宗帝も倭國の安寧と賀し。答礼。かゝり
 大使廣成。封を改めて奏す。吾日本天子万民の爲倭國小曆道を起さん
 とめ。下道吉備を貴國へ来り。め玉免集。恩借の義を願ひ。め所。己小四年の
 年月。今以て吉備を歸し。給らる。今般。臣等。以て脚治世慶
 賀し。且玉免集。恩借の義を再び願ひ。所。万望。脚許。客。かゝり。吉備
 も歸朝の脚暇を給らる。す。希ひ。め。啓奏せんむ。帝。聞。せ。あ。先年よ
 吉備。日本王の封書。持して。朕。國。来り。玉免集。需む。吏。切。あれ。も。用。組

皇帝より珍藏ある秘書。只。部。右。の。これ。他國。傳。へ。如何。臣。下。の。評。議
 區。て。一。決。せ。む。其。上。國。勢。敏。系。多。あ。て。り。う。年月。押。移。り。然。れ。も。日本。王。の。再
 度。の。烟。望。も。黙。止。せ。ん。む。彼。書。と。部。写。し。て。國。小。遺。し。然。と。日本。王。呈。さ。
 せ。ん。む。と。れ。道。六。鴻。臚。館。を。寬。く。逗。留。し。海。路。の。疲。勞。を。休。め。し。右。々。も。廣。成。拜
 謝。し。然。も。上。命。小。從。ひ。旅。館。を。相。待。ひ。せ。し。と。上。宮。中。を。辞。し。鴻。臚。館。を。歸。り
 々。儲。唐。帝。より。張。九。齡。王。維。ホ。と。接。伴。使。と。て。鴻。臚。館。に。於。て。倭。國。の。使。者。と
 種。小。卿。應。あ。ら。る。も。廣。成。以下。旅。館。小。逗。留。さ。る。吏。三。月。む。り。小。及。び。々。茲
 小。唐。朝。の。使。臣。安。祿。山。吉。備。公。小。耻。辱。と。取。せ。ん。と。巧。一。兩。度。の。奸。計。画。解。と。あ。せ。と
 深。く。遺。恨。ふ。す。狭。吉。備。公。切。害。せ。ん。と。百。般。小。心。と。尽。し。れ。も。い。ず。其。使。得。さ。
 る。所。小。此。般。遣。唐。使。来。り。吉。備。公。を。迎。歸。る。小。吏。定。ま。り。々。今。八。年。延。お。な。り
 ぐ。と。揚。國。忠。以下。の。奸。徒。を。招。け。集。め。高。議。々。我。日本。の。使。者。吉。備。公。入。と

成をんふ才機人小勝且勇悍なり。並由吾國久く逗留して兵學陣法等
 劍の術まで學び究め人の剛臆地理の難易必ち知る。渠を倭國へ歸させ後終
 此國の害と多し。然るも我王遠く慮なく珍藏の曆書と手(近た内へ歸國せし
 りんと志す。大いなる御倅更あつて。我國の爲に吉備を討て捨んと思へり。列
 位良針あつて相述らる。遂と云ふれ。揚國忠進と出吉備を害せん。あつて兵刃と
 用ひん。鴻芦館小酒宴を殺け。餞別の酒を勸ると。祇し酒中小鳩毒を入て
 吉備を先と倭人們小毒酒を飲もて。慶安六年八月。安禄山手を拍
 此謀大不妙なり。後とて毒針を用ひ。遂とて其準備を成ゆ。去程小吉宗
 帝へ吉備公と臣下小せんと思召され。其旨もまがれ。色と察し。今人望の書
 文へ歸國させ。めん。て廣成吉備名代ホと宮中へ召し。金鳥玉兒集及び大
 行曆徑貨物武器ホと下され。歸國の御暇を給り。三人も大不悦。拜謝

と厚く思を謝し宮中へ退出し。鴻臚館へ歸り。歸朝の用意と。急をなす。是
 より以前小麻州の玄東が妻隆昌女。日後園へ出て婢女と登。飼の粟の葉を摘て
 居。うろたふ。婢女忽ちを監を投。捨身を戦慄。と突起隆昌女。面を吃と見声も
 平日小変り。雄々しく。口を。我は日本の字士安部仲九なり。倭臣安禄山の
 奸針小陥り。高樓の上へ。餓死。無念の魂魄。陽土を去。と。聖聖鬼と成て。倭國の物
 使吉備大臣と守護。金鳥玉兒集と需り得。と。其一念通。と。去宗帝。遂
 小彼書と吉備公。給ひ。歸國の願と。許り。ゆ。然るも。安禄山。又吉備公と。毒酒を以て
 害せんと。巧り。汝。先年。岡基の。勝負の時。夫。玄東。が。肩を。隠さん。爲。小吉備公の。取れ
 黒石。一ツ。皮。取紙。小包。とて。吞。隠。せ。我。我。素。素。吉備公。も。知。れ。然。る。も。小。石。の。足。さ。と
 以て。照。病。鏡。小。字。穿。鑿。有。時。竹。が。腹。中。の。石。鏡。小。字。安。安。禄。山。見。処。て。己。小。明。小
 及。ん。と。せ。と。吉備公。你。夫。妻。が。刑。せ。れ。ん。と。憐。れ。く。妊。娠。の。子。種。な。り。と。言。わ。り。危

難を救ふ。彼時吉備公おろせむ。你ハ腹を断裁れ。東の刑せむ。其鴻思を思ふ。安禄山が郎舎へ到り。酒宴の酌をせむ。毒害の謀計を吉備公告危難と救の活命の思を報せ。敢て忽せむ。更分れと言。急ち地上おれ。向絶なり。隆昌大い。其婢女が。只。此。條。悉く。身。お。覺。ある。密。吏。は。是。亡。靈。婢。女。と。吉。備。公。の。危。難。と。世。か。も。下。と。思。む。身。の。毛。も。取。て。恐。ろ。く。先。婢。女。の。面。水。を。灑。り。て。呼。活。る。正。氣。お。り。て。忙。し。く。体。な。れ。茶。湯。を。飲。み。て。氣。を。鎮。め。せ。借。婢。女。の。向。の。汝。今。言。ふ。更。を。覺。へ。と。向。お。婢。女。と。何。更。も。覺。ふ。と。い。ふ。と。称。亡。靈。の。死。言。ある。更。と。覺。り。今。内。お。入。て。夫。去。東。お。巨。細。を。始。り。人。々。て。思。を。知。る。公。會。歎。も。お。ろ。し。と。名。り。猶。疑。ひ。て。倭。人。の。危。難。を。救。はん。と。亡。靈。の。怒。お。觸。て。如何なる。京。り。お。受。ん。も。量。り。に。依。て。安。安。禄。山。の。郎。舎。へ。到。り。如。此。と。言。て。酌。女。の。役。を。乞。受。て。倭。人。の。危。難。を。救。ひ。い。ぬ。郎。身。ハ。患。病。と。

稱して内房お引籠り。外より入る人逢ふ。更おれと言。んを去東。緒ひ其日より患病と稱して引籠り。隆昌女侍女奴隷を持。て長安の安禄山が郎舎へ到り。御願ひの條あり。遠く参り。者お。万。望。相。見。を。展。幾。も。ん。と。思。は。せ。む。れ。安。禄。山。在。宿。と。在。る。何。者。お。や。と。呼。入。て。對。面。と。す。何。と。中。へ。怒。お。女。を。れ。少。時。沈。思。て。漸。お。思。ひ。出。し。你。先。年。宮。中。お。て。棋。の。勝。負。と。競。し。時。給。仕。出。し。女。お。と。と。と。向。お。と。隆。昌。女。頭。を。低。仰。も。る。如。く。其。時。給。仕。し。せ。者。お。て。い。実。ハ。去。東。が。妻。女。お。て。棋。の。技。も。粗。知。て。い。ぬ。去。東。も。棋。の。勝。負。お。危。死。更。ハ。心。力。を。添。て。勝。せん。女。官。と。なり。て。其。席。お。侍。り。たり。後。る。倭。人。案。の。外。多。棋。の。高。手。お。て。夫。も。已。お。危。く。見。ゆ。い。ハ。幸。中。て。地。棋。を。お。し。ゆ。い。お。石。持。更。知。ず。と。思。ひ。倭。人。お。勝。更。能。ハ。世。を。夫。深。く。無。念。お。思。ひ。咽。へ。歸。り。て。心。痛。の。病。を。發。し。一。医。療。平。か。場。せ。も。其。強。け。此。頂。疾。病。と。なり。已。お。九。死。生。の。

際不臨之扁鵲華陀とりとも救ひかゝるべし是倭人と棋を争ひしより幾一難
 病ふいむ夫の仇ハ彼吉備なり。今もあれ東病死をりいふ女あかき吉備刺
 殺一夫の壺を慰んと思ひいひい君の御免を蒙り。吉備ハ近た内倭國帰
 いより承りり左あつて夫が病死の後仇を復しりい更も不叶む此國小在内り
 死心女報せまわく行い所鴻芦館あて銭別の脚酒宴を促しりい風小
 てい是天の上なる所なりと九死の夫を足捨遠く脚館へ忝りい仰願りい女
 小脚酒宴の酌を執せりい透を移りて吉備と刺眼まわく此願ひを御
 許しりい現世あつて君の婢女もあつて未世君が馬も成りいと言巧くい涙
 と流して滅し中ふとや々る安禄山ハ毒酒の練針其準備細ひい智才あ
 る酌人を得む誰をう用ひぬと心を賦る折あれ是天の助ありと大い悦びて
 面を和らげ。偕ハ東が妻あつて在る。我其時これを知り記你夫の為小仇

我復さんと思ひ貞節小免ど望の如く酌を執る。但し七首を用ひり及むと
 彼吉備ハ将来吾國の害と成る者あれ我君の為國の為小渠を毒酒を以て
 死滅させんと。己小其準備ハ細い倍酌の者克く智才を用ひて酌を執るん
 む練針中らす你其酒宴酌り及び頂二の瓶子小毒酒と無毒酒を盛
 て出さず。是倭人小毒酒を吞せ此國の者ハ無毒酒を吞らんあたりむとも
 酒瓶小無ある更みれも其蓋一糸の朱と引物小毒酒なり。朱点あれハ無
 毒酒なり。敢て夜眼小見縊る更みれ但し倍酌の者一人のを數人有とり
 とも。毒酒の酒瓶を你と今一人我腹心の女と二人是と主なる。練小機密乃大
 役かれを勢く仕損ざる更みれ又此國の者たとも毒酒の義を決して言ひ
 を練小山なる貴ふとハ此縊なり。你も練針を成遂ふ。真大の恩賞を帝小
 下してより心を用ひて勉よと言せられ。隆昌女満面小笑を含と大い悦びて

起て拜射し、絨巾の此あれを又何哉、患ひの毒れ、刃小血塗まどと夫の仇を復し、
を偏中將軍の賜なりと三拜九拜し、安禄山も満足の思ひをあら。是より
隆昌女を己が邸舎に留め、尙万隻の手配を定め、己小用意十分、綱ひれが
己小何擔の雀國輔、戎勅使とて、鴻芦館へ遣はる。時小廣成吉備名
代以下、鴻芦館小在て、專ら帰朝の用意をとり、急死預め、隻綱ひる小或
夜吉備公の枕頭小仲丸の壺、現生出て告て曰、如何や吉備公望みの玉兒集と
得帰朝の友と由得て、と満足し、ゆるん我も妾執を暗し、いとや。但し明日
勅使と稱して雀國輔来り、唐帝より此館舎小於て、餞別の酒宴を賜ふたりと
云ふ。是安禄山奸謀、酒宴小托と卿小毒殺せん、巧となり。我より
より其謀針を知彼云、東が妻小禄山奸針を告、倍酌と成て、卿小の危きを
救へと託せり。然れども彼女、実小卿小を救ふや否や、其心を知り、依て明

まで小荷物と明州の港の船へ運び積せ。何時小も出帆する、手筈と定め、おれ
偕明後夜酒宴の席小臨し、酒と吞休、小承り捨、兼て口小紅彩と合し、
おれ半酣、及んで紅彩と吐て、血を吐し、体小入せ、煩悶して、席上小伏せ、仗徒
者小扶らして、乘輿小乗。急小後門より出て、夜とより小港の船、走著、乗船して
急小出帆せ、れ、緑山追兵とくも、我身を感、个遮る、急、返り、乗船、出帆
乃手筈と能下知、又と告終り、次女小消くと、なう、吉備公大、小驚、急り
廣成名代、よと呼起して、密小亡壺の告と、語られ、れ、を、西卿小仰天、其、身を
一、大、隻、かれ、も、如何と、砂、れ、と、顔、色、我、失、ひ、る、と、吉備公制、己小敵の奸針を
知上、小恐、る、小不足、万、隻、小我、小任、ゆる、と、從者、奴、僕、と、乘、り、呼、寄、明、日、港、の、船、(緒、荷
物、以、運、ぶ、)と、下、知、尙、出、帆、の、手、筈、と、示、合、と、内、夜、と、早、曉、小成、れ、奴、僕、小
未、明、より、緒、荷、物、を、悉、く、運、送、し、る、廣、成、吉、備、名、代、亦、接、伴、使、る、王、維、小

出帆の用意調を近日發足を告げ吉相伴て王宮(奈内)に去る
 帝(小)拜謁して近日都(茂)發足を奏す。御暇を願ひ旅館(帰)らるる果
 して七(聖)の告のど。崔國輔(勅使)と稱して鴻臚館(入)来りたる也。遣唐使の面
 懸(護)小(是)を清(對)面ある崔國輔(自)倭國の(人)近日發足ある由を帝(上)を
 此(館)舎(小)於(て)明日(餞)別の(酒)宴(を)催(す)。留(別)の(脚)弁(を)給(り)んと(の)勅(詔)如(れ)其(旨)
 領(掌)あ(不)と(と)相(述)る(廣)成(以下)中(其)詐(謀)ある(か)ま(れ)も(態)と(吞)る(由)と(返)
 答(り)る(崔)國(輔)は(仕)に(返)り(と)小(笑)辭(を)告(げ)歸(り)ら(る)斯(て)其(日)由(過)契(約)乃(日)
 小(成)る(倭)人(を)鞍(置)馬(成)後(乃)外(小)駭(系)た(ま)せ(專)ら(拔)落(の)准(備)と(待)と
 由(也)す。崔國輔(揚)國(忠)安(祿)山(們)鴻(臚)館(へ)来(り)客(殿)小(宴)席(と)設(け)種(々)乃(器)
 血(珍)菜(鮮)肉(具)を(り)更(た)く(遣)唐(使)の(面)に(積)招(り)隆(昌)女(及)び(其)の(倍)數(の)女(と)
 花(麗)小(粧)して(酌)と(執)せ(又)美(貌)の(妓)婦(小)羅(綾)錦(綺)と(よ)そ(不)飾(ら)せて(舞)舞(舞)舞

彈(鼓)を(打)て(饗)食(應)り(原)より(始)の(程)毒(酒)を(用)ひ(れ)ば(唐)土(の)者(ハ)飛(九)齡
 王(維)を(先)して(太)小(真)小(入)盃(を)順(逆)小(廻)。(献)酬(と)り(ぐ)小(樂)と(及)り(々)を
 され(も)倭(人)も(酒)を(吞)体(小)見(せ)て(般)水(捨)二(の)肉(成)も(食)せ(と)針(の)席(小)坐(す
 心(地)一(日)の(暮)る(状)を(待)り(々)斯(て)夜(中)も(あ)る(れ)満(殿)小(銀)燭(を)燈(し)つ(ね
 恰(も)白(昼)の(如)く(暉)一(倍)酒(宴)と(盛)ふ(り)々(時)分(より)と(女)祿(山)隆(昌)女(と
 今(二人)の(酌)女(小)毒(酒)の(一)酒(瓶)を(持)せ(席)出(り)小(隆)昌(女)吉(備)公(の)危(難)
 を(救)ん(兼)て(扇)面(小)安(祿)山(が)巧(計)を(細)密(小)書(密)小(吉)備(公)の(袖)へ(投)入(り)吉(備)
 公(ハ)此(女)と(去)東(が)妻(と)あ(べ)と(思)れ(其)面(を)能(く)見(る)小(平)先(年)棋(石)を(の)と
 隠(せ)女(の)う(れ)愈(愈)亡(靈)の(告)の(違)る(感)に(淨)手(小)立(体)を(人)か(れ)所(往)密
 扇(子)を(開)け(る)る(小)細(書)を(毒)酒(の)謀(計)を(記)す(鴉)毒(小)中(一)体
 小(此)席(を)早(く)避(れ)と(書)す(依)て(扇)子(と)懷(中)小(隱)水(口)合(言)で(回)乃(席)



小叔着れり。隆昌女吉備公の座をまわし、圓手早く毒酒の瓶の蓋を無毒酒の蓋と取入れ、衆人皆泥の如く酔て眼も定まらずと笑語を歌罵ると喧し、これにて雅見答る者もなうり。隆昌女毒酒の瓶を執り吉備公の前より。此御酒ハ帝より別給はし仙家の美酒にて倭人への勸めよとの詔命小ていぞ敬んで拜味めと言さる。恥と同結りたる小吉備公其意と察し、身を毒酒あべと思ひ廣成名代等小同結り。先自身満くと引受吞体にて密に捨厄と廣成へ献さる。素より此酒毒酒にあはれぬ。隆昌女が同結り、早く毒酒中じ体にて席を退れり。斯て廣成名代も厄を受て酒を吞体をかして悉く捨るも、隆昌女が取換り瓶の酒を鴆毒ともあはれと相伴の唐人手ばら瓶を執てこと、敵又六日伴の者も勸め毒酒を吞者五六人小及ひ、小吉備公六洋と一声叫ひ、小舎へ紅吐て席未同伏苦じ体小てあはれぬ。近侍王

發た急小懐抱て席を退れり。是小續り、廣成名代判官録史の録り皆合は紅粉を吐く毒小中じ体を追ひ、小介伏せしを兼て示し合せ、近習尾後周障強だて扶抱、退角小真の毒酒を吞り、唐人も鮮血を吐て此所彼処小介も喚れ苦むむと、素安緑山毒酒の密計を深く秘して、泛くの者小知せざりし、小席中の騒動大方あやふ。登りの強飲大食にて嘔吐し、子者亦も毒小中じと思ひ立、恐だて罌皿を打溢し踏確れ、彼今人の毒酒の瓶持り女も俱小周障て瓶をとり落し、瓶小砕けて毒酒の散れ、張九齡王維亦も、此度の巧計を知れぬ。是ハ女祿山我後を毒害せん巧と、あべと思ひ、毒小中じが幸小して鴻臚館を逃出私宅と、地歸り、此騒動の内小吉備廣成以下乃人々後門へ遁し、出遊し、馬小亦棄り、明州の港と望み、鬼出を処小仲丸の靈現れ出我往方、来り、夕と呼り、忽ち二團の陰火と感導れ、るる、人々大い、力と

得時は是臯月下旬の烏夜ふれも鬼火の光を目的と混鞭あて馬を逸れ
 必従者も後れと息を限小港をさして走り去る。却説鴻臚館の安禄山
 揚國忠崔國弼の管侍の們が毒酒の中へ飲込て致致から正々倭人を盡く
 毒の中へ休むれを心脱て席中の騒動を鎮まを武官の者と呼倭人の首領の者、
 毒酒にて自滅せしむるも従者們の毒酒を飲さるも有在る生むる日本、
 喘らむるも後日の患と成る久渠亦が宿る客房へ押寄一人も余さず屠殺よと
 下知し武人亦と先かして倭人の客房へ馳行てくる小豈そくろん更小人影も
 なく後門の扉も開け門の柱も去東が妻陸昌女縛付られて有るも安禄
 山甚だ訝り何者不斯縛られやと向々隆昌女答て妾相公の命令と
 承て倭人毒酒を盛ひし彼吉備夫の仇敵を其首と得んも倭人の
 客舎潛来りの所吉備が従者亦と急縛られ倭人亦成轎に乗此門より

と白む安禄山山下大の旗を先陸昌女縛解得るも斐文鬼とよる者亦士
 率二百人を授け你明洲の港へ追行倭人を盡く討取て歸ると命も斐
 文鬼領掌し緒平と房し明洲の港へ馳到りも早倭船出帆せし後たるも力
 なく空手振て歸り安禄山が館へ入り斯と報れられ安禄山大望と失
 ひ斐文鬼が怠慢の罪を散り比懲り為方おれ其後小捨れ其後安禄山
 ハ唐の天監十四年叛逆を企自卒たりも至徳二年安慶緒の為お殺れり
 玉津嶋明神勸請 衣通姫人麻呂傳
 却説吉備大臣在唐の内本朝めて東咽蝦夷の嶋人們國司の命も皆死
 大椽佐伯宿禰兒屋と名汝攻殺し國中横行し民の財物と奪掠り二國大
 小騒乱する由追々都へ進し多も天皇逆鱗中く急死夷賊と伐夷ぐ
 命もとて藤原宇合と大将と高橋安石と副将とて坂東九國の兵士と

三方余騎附屬しひかれ。而將勅命を承り都於進發と奥州(下)向し賊軍
 と合戦度ふ及び遂に官軍勝利を得て夷賊と伐散し虜の者と曳て
 都へ凱陣ありたるより。天皇其軍功を御賞美す。官位昇進の除目行
 れ坂東の諸軍ありしを御賞禄と給りて帰國せしめたり。東國の賊
 乱斯静謐ふやひかれ。上下安堵の思ひをあたると。小笠原盛星逆行し且又
 大白星且現れ天変頻りお績くも。如何なる変更やあると諸人安ん
 心なく陰陽の博士勘文を上りて深た御慎なりと奏し。天皇歡慮
 穩りあせむ。四海安全の御祈りありしを。諸國分寺と建させ。又三千人の
 所司を出家得道させし。猶大和國の諸寺を命せて。七日金光明經を續
 させし。其の功徳に依て。また凶變おちりたり。其年の冬、天皇
 夢想の告を感心し。紀伊國海部郡衣通姫の靈を祭り。玉津嶋大

明神と神号して崇め。則ち和歌三神の社なり。抑衣通姫と八人皇二十代
 允恭天皇の御后。又坂大中媛の御妹。二岐皇子の御女なり。此姫君天の生
 る麗し。其質を描くとも。毫もおまよぬ。許して。桃李の顔を。百の媚を。含
 嬢娟。姿を風小惚り。柳の如く。素雪の肌濃く。丹花の唇受敬づれ
 一度咲を。城を傾け。二度咲を。園を傾けると。賦し。此君の優ら。いと
 かり許の美人。肌の艶衣を。徹通り。外おん。百の許かり。と。維り。と。あ
 衣通姫と。やせ。と。これを。此姫君を。一度。人。魂を。失ひ。眼を。奪れ。と。と
 の。更。帝。衣通姫の。世。類。美人。か。り。衣通姫。母。公。隨
 ひ。近江の。坂田。お。れ。其。實。勅使。をつ。り。せ。ひ。と。小。姫。八。御。姫。皇后
 の。思。と。畏。と。悼。り。ひ。て。固。く。御。辞。退。あり。と。帝。尚。撞。し。ひ。七。度。と
 御使を。立。り。と。姫。を。固。く。辞。と。召。應。じ。の。と。帝。大。に。御。心を

怒りぬひ舎人中臣の鳥賊津とる者、亮めて覚ある者、あれが鳥賊津言
 きて、你衣通姫の終りに到り、如何にわらむとも強て伴ひ之と宣ひたる也、鳥賊
 津奉り、松宅ふくま、掃を裏納て是を袂小隠し、諸坂田ある衣通姫の
 方、到り、帝よりの御使のよ言入る、お姫のまゝ、六帝の紹り、我數度許
 とて、つゝ、六、寂も恐まれ、妻あが。御姉、皇后の思召人と、つゝ、お憚りわらぬ
 百度千度百せるとも得とを、おと、世首、歸て、帝お奏し、なるとよとて、更
 お入内、まの、入、気色、ア、え、ざり、れ、ぬ、鳥賊津、中、つゝ、八、仰せ、さ、る、更、お、て、い、ぬ、ぬ、此、度
 臣への紹り、お八、姫、後、令、如何、よろ、中、も、強、て、伴、ひ、さ、る、危、し、よ、の、御、使、方、に、ま、れ
 む、此、も、歸、り、ぬ、刑、せ、ま、る、更、治、定、お、て、い、ぬ、道、お、を、此、庭、お、て、相、果、し、
 とて、敢て、ま、ん、と、せ、ま、る、七、日、ご、同、庭、お、跪、つ、て、動、も、食、物、を、さ、ら、ぬ、れ、ぬ、も、少、り
 受、む、ぬ、人、あ、れ、隙、を、う、ら、ひ、て、彼、掃、を、暗、か、り、出、し、と、食、し、人、目、お、八、飢、死、と、ま、き

体、お、ぞ、と、て、は、さ、る、ぬ、姫、鳥、賊、津、の、体、を、見、て、思、ひ、ぬ、さ、る、御、姉、皇、后、の、如、く、ぬ、ん
 一、成、憚、り、て、今、日、よ、で、八、勅、命、と、數、度、背、た、な、れ、ぬ、思、ひ、ぬ、わ、さ、り、心、ま、り、具、鳥
 賊、津、お、餓、死、さ、る、ぬ、罪、深、た、ら、ぬ、と、お、す、と、よ、ろ、く、心、け、ひ、て、大、内、へ、参、り、と
 の、さ、し、ひ、さ、る、お、ぞ、鳥、賊、津、仕、は、ま、ら、ぬ、と、悦、び、逐、お、姫、の、御、供、と、内、裡、歸、り、た、ぬ、
 帝、厚、く、鳥、賊、津、が、功、を、賞、し、ぬ、數、く、御、被、物、を、給、り、ぬ、諸、姫、を、召、入、て、御
 覽、あ、る、お、御、食、し、よ、八、艷、麗、お、て、花、お、も、ち、ぬ、月、も、因、命、た、美、人、た、れ、ぬ、御、電、愛
 限、り、か、く、少、時、も、御、側、を、放、り、ぬ、と、お、す、お、皇、后、此、御、有、さ、る、御、覽、ど、御、如
 の、色、を、穂、あ、わ、ら、ぬ、お、お、お、と、帝、お、さ、さ、り、お、皇、后、の、御、心、を、察、し、ぬ、お、八、日、宮、中、お
 在、せん、ぬ、如、何、と、て、衣、通、姫、の、別、殿、を、藤、原、お、管、ぬ、ぬ、其、所、お、住、ぬ、ぬ、日、夜、御、幸、絶
 る、隙、ゆ、ひ、ら、り、ぬ、其、折、り、ぬ、皇、后、八、御、懷、妊、お、て、己、お、月、満、皇、子、と、生、せ、ぬ、ひ、さ、る、帝
 日、く、お、藤、原、の、宮、へ、通、せ、ぬ、と、お、す、ひ、て、大、お、好、と、恨、ぬ、ぬ、お、産、屋、お、火、を、う、け、焼

死んぬる女房達大に殺たよふ苗のまひせ帝、斯と奏し、乃ち帝も
 深く殺せむひまむ、皇后を看めさせのひて、まづ藤原の宮の行幸なかり
 たり、斯て翌年二月、帝衣通姫の更を立せむひの密に藤原の宮、行幸な
 り、ひのひたる久く程と隔てむひ、くも姫、如何思ふと、思召物、後、御身と忍
 び姫の有さると、窺ひぬ、此又姫、久く通せむ、帝と意しく、思召物、多、軒、場
 乃、翠、簾、小、す、ち、か、る、蜘蛛の糸、引て下り、たると、足、ひて、帝の思ひ、御座とも、知む、ほど
 我背子、か、ま、る、を、死、宵、わ、り、さ、か、ぶ、の、蜘蛛、乃、さ、る、ま、ひ、く、ひ、て、ま、り、も
 と、口、さ、さ、さ、の、ひ、を、れ、と、帝、是、を、ま、り、て、御、感、情、斜、め、あ、む、は、と、さ、入、り、ひ、て
 さ、ら、か、く、錦、の、ひ、も、と、解、き、げ、て、あ、ま、さ、は、糸、む、と、た、ら、一、夜、の、も
 と、御、返、一、歌、を、遊、む、い、よ、く、御、遣、愛、深、く、是、下、り、ま、り、せ、ら、く、通、せ、む、ひ、ひ
 前、む、増、て、御、契、り、深、く、お、せ、む、ひ、た、り、皇、后、は、此、頃、帝、の、藤、原、度、く、行、幸、中、

の、入、を、深、く、妬、む、恨、む、ひ、衣、通、姫、も、御、恨、む、の、交、り、と、違、ア、ク、ひ、た、り、も、姫、心、甚
 く、思、ひ、或、時、帝、お、奏、し、ひ、ひ、る、ハ、女、大、宮、お、近、く、侍、ひ、て、常、お、君、お、見、し、ま、り、さ、い
 かり、ひ、を、ぬ、れ、も、御、皇、后、妻、お、つ、た、て、君、を、恨、む、も、更、さ、て、心、ま、り、く、さ、ら、く
 を、願、く、ハ、妻、を、遠、き、所、へ、移、し、置、せ、む、と、乞、ひ、た、れ、を、帝、其、願、ひ、お、任、せ、む、ひ
 河、内、國、茅、渟、お、宮、室、を、造、り、て、姫、と、移、し、住、め、し、其、よ、ハ、度、々、日、根、野、御
 狩、を、催、され、其、お、托、し、て、衣、通、姫、の、許、へ、通、せ、む、ひ、と、云、ふ、此、姫、ま、り、ハ、天、上、の、玉
 女、お、い、の、仮、小、人、界、お、生、成、托、し、ひ、ひ、お、や、聖、武、天、皇、の、御、夢、お、我、國、家、を、守
 護、し、殊、更、倭、敵、の、道、を、守、ら、ん、と、告、め、ひ、ひ、也、儲、こ、と、此、度、社、檀、と、造、堂、し、て
 神、と、崇、め、祭、り、ひ、ひ、な、り、斯、て、玉、津、嶋、の、宮、社、造、堂、成、就、し、た、れ、を、翌、年、乃、二、月
 帝、紀、伊、國、和、哥、の、浦、へ、行、幸、す、り、玉、津、嶋、へ、御、社、参、り、て、幣、帛、を、捧、げ、神
 を、ま、じ、め、む、御、拜、礼、あり、其、夜、ハ、社、檀、お、宿、り、の、ひ、を、ま、り、其、夜、帝、の、御、夢、お、衣

通姫天女の姿を現し勸誘の義を乞ふに悦び謝し一首と詠じ
 之をよまむ此世おあはれん名もあはれし和歌の波
 と出づると見えし御夢さめられむ帝信心肝命のいよく神慮と崇
 むひ十余日御逗留あつて浦山を御遊覧すくく風の風景言絶し絶し
 妙不思召されし明光の浦と呼かりし睿慮くく都還御なりし是よ
 春秋二度玉津嶋明神の奠祭を執行せしむる此年小柿本人丸山見
 廻りて卒去と行年八十五才命終の時辞世の哥と詠じと曰
 かもし山の岩根しまける我をうもあはれむで妹が待たわらん
 抑此人丸其出所も其父祖もともみ解らるる世の言傳ふる所は天武天皇三
 年八月三日石見國山野より村落の民家の枡木の本に忽ちとて二十紆の人
 出現を其体奇相異骨すと天性よく和歌詠されしを國司是を奇なりと

と朝廷(奏聞)もむむふふと即ち禁廷(徴)きて其者と睿覽す。和哥
 を詠せし風調丸あはれを睿感ありて姓名を抄本人丸と号し石見権頭
 小任(和哥)の御侍續とたりも其次の年播磨守小補任せられし和哥乃
 詠言れ高し持統文武の両朝事古今独歩の名人と稱せられ秀詠中と
 不の(と)と明石の(と)の朝露(と)しまられし舟を(と)おり人
 右の哥殊小人小繪(と)せり此外逸作多し萬葉古今兩集(と)撰(と)入れし。此人丸
 後世神小祭られ入大(と)明神(と)神号(と)和歌三神(と)の(と)社(と)と崇められし
 長屋王(と)譏(と)死(と) 大伴小虫(と)報(と)仇(と)王(と)事(と)
 茲(と)小(と)彼(と)安(と)部(と)好(と)根(と)が(と)後(と)楯(と)と(と)頼(と)し(と)左(と)大(と)臣(と)長(と)屋(と)王(と)と(と)天(と)武(と)天(と)皇(と)の(と)御(と)孫(と)中(と)高(と)
 市(と)王(と)の(と)御(と)子(と)を(と)れ(と)緒(と)家(と)の(と)用(と)公(と)も(と)も(と)重(と)り(と)々(と)も(と)何(と)なる(と)更(と)も(と)密(と)小(と)隱(と)謀(と)
 の(と)企(と)あり(と)と(と)深(と)部(と)君(と)足(と)中(と)臣(と)官(と)所(と)連(と)東(と)人(と)多(と)と(と)朝(と)廷(と)に(と)訟(と)れ(と)を(と)帝(と)大(と)小(と)孫(と)を(と)

かみ長屋王朕小何の恨有て隠謀を企つらん急ぎ其実否を証と藤原
原守合命の事。守合勅詔を奉り先家人二百人を以て長屋王の館の四方を
とり囲まめ。自ら自身に長屋王の館に迫りけり。小長屋王は俄に軍勢乃
館をとり圍み。如何思うれん。奥殿小内篋り。自ら劍を串けて自刺せ
られ。其れ北の方言備内親王息男膳部五木と。自ら自害有る所。守
合馳著。更の体を令。長屋王の館に居合せ。下野宿奈古以下七人を捕
捕て歸り朝廷に。斯く奏聞有れ。七人とも禁獄させ。後遠嶋流罪小
行し。抑此長屋王。則小のり。高市王の御子。小御幼稚の砌り。或相者
此皇子の相を看す。此君不慮の義。命と亡ひの相。ませり。ゆ。出家入
道。乃。天皇を終め。命。さ。ある時。災害を免る。一。更。能。入。す。
十。れ。を。大。小。憂。ひ。の。も。御。愛。子。の。更。た。れ。を。出。家。させ。り。ゆ。の。を。く。種。...

加持祈禱をさされ。其禍ひを拔ゆられ。果と天武天皇飛鳥川一
幸の折々。高市王の公達。長屋王。過て淵に没れ。己小御命の危うきを。大伴
金道折ぐ。其所小在。命を助け進ませ。更。必。先。を。免。れ。る。事。御。又。高。市。王
と大。小。御。喜。悅。あり。是。ひ。小。加。持。祈。禱。の。功。力。也。危。人。命。と。助。る。事。多。し。
今。小。悪。相。の。毒。ひ。の。消。滅。せ。り。御。安。心。有。る。事。多。し。昔。年。迄。今。年。不。慮。の
珍。事。亦。て。刃。小。く。を。死。亡。し。ゆ。ひ。を。小。彼。相。者。の。約。符。合。せ。り。と。習。登。り。そ。れ。今。度
乃。一。件。其。根。元。を。探。り。ば。小。長。屋。王。帝。を。恨。ま。り。て。隠。謀。を。企。て。ら。れ。小。小。非
と。三。品。舍。人。親。王。朝。政。の。義。あり。長。屋。王。の。下。に。小。儀。を。三。度。も。難。拒。せ。り
ゆ。小。長。屋。王。心。中。小。大。小。憤。れ。り。ゆ。舍。人。親。王。を。伐。亡。さん。時。々。荷。擔。乃。者。と
招。れ。り。ゆ。小。小。彼。安。部。好。根。を。味。さ。る。と。万。更。負。担。せ。り。き。あり。其。後。堂。の。中
にて。も。重。き。小。小。漆。部。君。足。中。臣。東。人。兩。人。か。り。き。り。漆。部。中。臣。長。屋。王。と。恨

る更あつて忽ち變心。帝小對、謀殺の催、有平小總、奏せし由、此度の
時、義小及び、つたり。然るも長屋王の腹心の雜堂、小大伴、子忠、といふ者有る
が長屋王自殺の砌、跡を暗くして逐電、名を公より緒方を尋捜せられ
ども更小所在をたれられ、其終捨おれ、二月、許まで彼小魚、何國小隠居
らう、或夜深夜、小中臣、東人の館、忍び入、東人を圍の中、半、刺殺、其首を
とりて立退、其後、食の体、小身を給、面、小涙を塗、眼、小鮮をまき、と相
格を、變、大内の御門の、ろ、成、徘徊、多と、小魚、たると、知者、更小、た、り、り、時、小
漆部、君、足、を、斯る、更を、敷、ゆ、も、と、泰、内、せん、と、西、三人の、從者、と、引、連、禁、内、
乃、ち、ろ、く、来、う、と、ま、る、小、溝、の、際、小、摩、被、を、伏、非、人、忽、ち、刎、起、隠、持、り、力
を、拔、持、走、り、つ、つ、君、足、を、嚙、と、斬、れ、也。君、足、大、小、孩、を、急、小、逃、入、と、ま、れ、も
重、丸、を、た、ま、り、得、む、屍、居、小、噓、と、倒、れ、る、を、小、魚、た、ま、り、け、て、二、太、刀、三、太、刀

斬、る、小、と。遂、小、敢、か、く、討、ま、る。君、足、が、從者、二、駈、馬、を、う、ひ、て、王、を、助、え、ん
とも、得、せ、と、惘、果、て、在、る、も、眼、前、至、の、討、ま、り、成、ん、て、流、石、諸、人、の、る、所
を、愧、々、抜、連、て、切、て、り、ま、れ、も、小、魚、ハ、嗚、呼、の、者、あ、れ、を、此、も、怖、ま、す。血、力
を、揮、々、切、進、も、右、小、擧、半、左、小、半、を、勇、気、奮、出、て、闘、ひ、け、り。一、人、を、大、加、衣、鉢、小
切、介、し、残、る、二、人、の、手、と、肩、せ、ま、れ、を、叶、し、と、思、ひ、々、人、兩、人、も、小、言、が、ひ、た、か、ど
逃、失、ま、る。此、強、動、小、禁、門、守、侍、の、武、士、も、先、より、東、西、を、圍、も、て、見、居、れ、れ、も
誰、の、人、進、も、て、小、魚、を、搦、捕、ん、と、ま、る、者、か、互、小、相、讓、り、と、あ、れ、お、く、と、り、斗
ち、り、れ、れ、も、已、小、君、足、の、家、人、入、を、討、ま、り、二、人、を、手、と、肩、て、逃、去、ま、る、と、ん、て、大、勢、力、の
武士、二、人、進、も、て、小、魚、一、人、を、搦、め、捕、ん、と、牛、次、た、れ、れ、も、小、魚、大、言、小、見、ハ、尋、常、の
狼、藉、者、お、も、い、ま、と、先、小、脚、不、審、を、蒙、り、自、殺、の、ひ、し。長、屋、王、の、家、人、小
大、伴、小、魚、と、呼、ま、る、者、り、我、至、君、長、屋、王、ハ、當、今、小、對、ま、り、て、聊、も、野、心、と



大伴の小屋王
 居長屋王の爲
 身七五三
 十辛方苦七敵
 漆部の君反

大伴の小屋王

存せんとす。中臣東人と淡部君足の兩人との始末主君と和熟いあつて俄
 小及忠と今上對しより逆意を企つる事小鏡奏しける也。征將をさし向ら
 主君御親子北の方まで自害しめし。依て我主君の虚名と雪は具脚無
 念を晴しよせんと東人を先がけて刺殺し。今も君足を討て亡君の御爵
 憤を晴ししむ。今命生々何んぞ主君方の殉死をものたりと呼り忍ち
 腹を十文字小搔切てとふる。是を見聞する諸人大り感下天晴大剛乃
 者の挙動と称せぬ者ふりり。此吏天職小達し禁獄させし下野宿
 奈十呂以下の輩と右司小掄て嚴く糾問させし。長屋王の企六帝を傾け
 ちんらん為す。舍人親王小恨ありて彼卿を討取んと結構ありしとて
 白状しるふ。長屋王の隠謀の御疑ひとけ。淡部中臣か鏡奏し極りける
 然れども執政も舍人親王を謀らんとせし。企小合夥せし。条罪誣しむとて

儲と七人も流罪小行れけるなり

聖武帝光明子宮御幸

吉備大臣与廣成寺帰朝

天平七年三月小帝御后藤原光明子光明子皇后的宮御幸ありける。抑此光明子
 と小藤原淡海公第二の御女にて天生容貌端麗ある也。彼西絶飛燕と
 とも此君小向ひむを面を掩て愧ぢれむ美人にて雪の肌艶やうやう。光有ら
 ず。わねとて光明子と号す。帝の御寵愛他小異ふ事なく。斯て皇后の
 宮小於て和哥絲竹の御遊を催され供奉の公卿小宴と賜ひし。小はれ乳小
 仁義礼智信の文字と一字づつ書て。是を裏向小伏満座の緒卿小探りし。せ
 られ。其文字小従ふ。緑の物を給りける。堂上堂下さかちれて。與小樂し。と
 皆萬歳を唱へ。并出度還御かひりる。却鏡先小と。遣唐使多治比の
 廣成と。名代吉備の人。仲丸の靈隆昌女。おん小の情小より。毒害の危難と

免れ道成急々明州の港に着て船に乗遊を解て出帆し天の助る処
小や折しも順風快く吹て船の走る更程がごとく是より日を追風吹海上滞
りなく七月下旬九洲多祿が嶋小着船し大使副使以下悦ぶと限
りなく日幸十月小平城の都に着到し唐成名代吉備判官録事小つる迄
赤揃々参内し帝天機嚴く遠路の波濤を凌如無事小帰朝せ
し代御賞美かちひる吉備公即ち唐帝より賜はりし蓋食内
典金烏玉兒集十卷大衍曆經一卷唐札二百三十卷。至成十二卷。孔子及び
十哲の画像一袖日影を測る鐵尺一枚銅の律管一部。鉄の方響音のてく律
管の音と子と具十二條樂書要録二十卷。絃纏漆の角弓二張馬上水を飲
漆弓二張面を露し四節を漆し角弓二張甲と射る筈二十隻平射を射十隻亦
を献上せしれども帝の太上皇も大御御感ましく其功を賞しひて官位

進め祿を加へし廣成名代以下皆賞祿を給りたり。儲太上皇吉備大臣こ
向せし仲丸の吏と回ひしれども吉備公涙を流され仲丸が玉兒集と写し取ん
ぬめ彼小唐帝お仕て名を朝衡と呼し十四年同苦学し遂小彼書と写し取清
川とい船して一旦唐土を去れども惡風小遭て玉兒集海中海底小沈れ安南國へ
漂着。又唐朝へ歸り安祿山が奸計小陥りて憤死せし條より靈鬼とて
因棋を教し更及び野馬臺の待を初瀬の觀音の利元血小よりて續得し件
仲丸の靈隆昌女小鉢と毒酒の難と救せし更また落ゆなく奏聞しりるゆを
帝も太上皇も聞召し母小驚歎しゆひ仲丸が辛辛の艱難も其非命の死を
哀れしゆひ且忠魂靈鬼とかりて吉備を扶け遂玉兒集と得し忠義を感
しゆひて正三位小増宣ある吉備公も仲丸の遺孤満月丸が母の仇敵好根を討
入唐の隨を望し義を奏聞されし帝の孝心を感ありて即ち朝廷召

出づりし満月丸の安部の家督と嗣^{ついで}つる宣旨と賜^{たまは}り。又先地の上^{うへ}加禄^{かろく}をあらえ
りしり。満月丸の吉備公の父の遺物の行袖^{ゆきそで}を得^えて此年月待^{まち}撞^つれし父の丸を悼^{なげ}
思^{おも}ふるが今禁^{きん}廷^{てい}するも安部の家相續^{けさうぞく}の宣旨^{せんし}ありし脚^{あし}加増^{かぞへ}と頂戴^{ていだい}して大^{おほ}に
悦^{よろこ}び厚^{あつ}く天恩^{てんおん}を拜謝^{らいせ}しなり。脚^{あし}暇^{ひま}を給^{たま}り吉備公とてし退^ひ出^でしうらう。吉
備公満月丸と自ら^{みづか}の館^{たね}へ伴^{とも}ひし元服^{げんぷく}加冠^{かかん}を名^なを暗満^{あんまん}と改^{かへ}名^なを安
部の名跡^{なせき}をと續^つされし後^{のち}代^{しろ}天^{てん}文^{ぶん}晋^{しん}道の博士^{はくし}安部^{あべ}晴明^{はるあき}此暗満^{あんまん}の裔^{いせ}孫^{まご}

舍人親王薨去

始痘瘡流行條

あがりなり

日^ひ年^{ねん}十二月^{じふにがつ}乙丑^{えいしゆう}日^{にち}執政^{しやくしやく}一品^{いっぴん}舍人親王^{しやにんしんおう}薨^{こう}去^{きよ}しり人^{ひと}の老^{らう}を^を過^あ齡^{れい}六十^{むそ}とを^をまえ
此人^{このひと}と天武^{てんぶ}天皇^{てんかう}弟^{あに}三^{さん}の皇子^{みこ}して天性^{てんせい}聰明^{めいめい}俊^{しゅん}才^{さい}博^{はく}く古今^{ここん}の書籍^{しよき}通^{つう}
曾^{まご}て先帝^{せんてい}の御^み字^じ小^{せう}勅^{しやく}命^{めい}を奉^{ほう}り日本^{にっぽん}書^{しよ}紀^き三十^{さんじゆ}卷^{まき}と撰^{せん}て献^{けん}するなり織^{おり}
此^{この}書^{しよ}わく^{わく}せむ後^{のち}代^{しろ}か上古^{じやうこ}の政^{せい}風^{ふう}公^{こう}更^ま有^あ職^{しやく}等^{とう}と知^ち吏^し能^{のう}より^{より}たれ^{たれ}実^{じつ}亦^{また}吾^{われ}朝^{てう}

乃^{すなは}良史^{りやうし}といふ^い斯^す程^{じやう}の智^ち能^{のう}の賢^{けん}者^{しや}もて朝^{てう}政^{せい}私^しに淡^{たん}海^{かい}公^{こう}相^{さう}繼^{けい}ぐ大^{だい}
政^{せい}宣^{せん}の更^まを執^{しやく}行^{かう}れし^しる國^{こく}家^け柱^{ちゆう}礎^その臣^{しん}も上下^{じやうじやう}惜^{しやく}まをとい^い人^{ひと}なり。殊^{こと}更^ま
帝^{てい}甚^{しん}く御^み悼^{たう}惜^{しやく}あり^し鈴^{すず}鹿^か王^{おう}を以^{もつ}て葬^{そう}式^{しき}の更^まを執^{しやく}整^{せい}へり^し其^{その}儀^ぎ
式^{しき}ひ^ひく太^{たい}政^{せい}大臣^{だいじん}の葬^{そう}奈^な准^{じゆん}せられ^れり即^{すなは}ち帝^{てい}より中^{ちゆう}納^{なつ}言^{げん}多^た治^ち比^ひ真^ま人^{ひと}を
勅^{しやく}使^しく^くて宣^{せん}旨^し帯^{たい}を^を太^{たい}政^{せい}大臣^{だいじん}小^{せう}贈^{ぞう}宣^{せん}ある^る旨^し噴^{ふん}させ^せり^し此^{この}親^{しん}王^{おう}乃^{すなは}ち御^み
子^こ後^{のち}小^{せう}帝^{てい}位^い小^{せう}即^{すなは}ち^ち淡^{たん}路^ろの廢^{はい}帝^{てい}と^とも^もは^は是^{これ}は^は是^{これ}なり^{なり}。此^{この}廢^{はい}帝^{てい}天^{てん}平^{へい}室^{しつ}宇^う
三年^{さんねん}六月^{りくがつ}小^{せう}御^み父^ふ舍^{しや}人^{にん}親^{しん}王^{おう}と^と尊^{とん}び^び崇^{すう}めて崇^{すう}道^{だう}盡^{じん}敬^{けい}皇^{かう}帝^{てい}と^と縊^{じゆう}を^を奉^{ほう}り
ま^ま山^{さん}城^{じやう}廻^{かい}深^{しん}草^{そう}郷^{かう}藤^{とう}社^{しゃ}を^を建^たて^て其^{その}靈^{れい}を^を神^{かみ}小^{せう}鎮^{ちん}祭^{さい}り^りの^のひ^ひなる^{なる}然^{しか}
有^あり^しより^{より}以^{もつ}末^{まつ}末^{まつ}世^{せい}の^の今^{いま}の^のま^まで^で宮^{みや}殿^{てん}魏^{ゑい}く^くと^とて神^{かみ}德^{とく}灼^{しやく}然^{ぜん}を^を奉^{ほう}り^し泰^{たい}緒^{しよ}乃^{すなは}
貴^き賤^{せん}引^ひき^きを^を拍^{はく}牟^ぼの音^{おん}絶^{せつ}間^{かん}を^を尊^{とん}と^とり^りなり^{なり}是^{これ}は^は且^{かつ}く^く也^{なり}。今^{いま}年^{ねん}筑^{しゆく}
此^{この}系^{けい}方^{ほう}より裳^{じやう}瘡^{そう}と^と号^{ごう}る大^{だい}惡^{あく}病^{びやう}傳^{でん}染^{せん}来^きり^り夏^{なつ}を^を徑^{けい}秋^{しゆ}を^を起^{おこ}す^する^る至^{いた}る^る也^{なり}

或止む上公卿大夫より下市人農夫の別なく此惡瘡
 を病て大死する者奉て針る違なく。吾皇國往古よりいまだ如是難病
 疾患人なく。今年始めて流行せし由（典義名醫といふも其療方を知
 る諸國も是がごとく大に困る。帝も甚きを慮を愍し（緒國
 の神社）奉幣使を立わし緒寺の高僧も大法秘法を修せしめしむ
 更ふ其險なく。此年より連年痘瘡流行し死する人の多かりき。其中の
 天平九年四月小參議民部卿正三位房前公淡海公男 五十七 日七月小兵部卿從三
 位麻呂淡海公四男 四十三 日月小正一位左大臣武智大呂淡海公嫡子 五十八
 部卿太宰帥宇合淡海公三男 四十四 右を藤家の四家と稱し此人は皆痘瘡
 を患て薨去せられたる。列位當今の御叔父にて。殊小皆棟梁の臣おれを
 帝も御愁傷浅くご上下も惜と歎くぬふりなり。抑武智大呂の館ハ

南小有とて南家と号し房前公の家北有と北家と号し早合公武部卿
 茂兼られ也武家といひ麻呂ハ左京大夫を兼らるるを以京家と号し
 後世藤原家の末葉とといふ咸く此四家より流出る所なり
 本朝通記の注小羅山先生曰。豆瘡の病緒と医家者流小者る小隨の巢
 元方。傷寒。班瘡。豆瘡。傷寒の部小有て治方あり。宋の陳言といひ
 班瘡病ハ内經張仲景皆載と蓋し魏の朝より此病あり瘡の頭白く
 根赤たものを俗呼て豆瘡とて其形ち相似る由あり。是所謂班瘡
 なり。細粟麻子の如きものと俗呼ぶ麻疹といふ。又形ち大あるもの有芋と云
 萍といふ皆重ひくくする也。名呼も異なり。孫真人も唐の高祖の時
 乃人なり。天平八玄宗帝の兩年中當る。茲に豆瘡ハ中華より吾國の
 九州傳流し中廻より都にうつる。素里内經小載するところ。仲景の論せ

ざるを以て往古無是変公知命と云。或書小曰後漢の光武帝建武
 年中ねんちゆう南陽の庸を伐し時軍卒其地の毒氣を受て此瘡を傳染患
 てより中脘ちゆうぐわん流布と云。繒しんも故に此瘡を膚瘡とらひ。又天行の疫癘えきれんを
 天瘡てんさうとも号し幼より老おとしのるまで一度病て再び其瘡を患ふ由よしに
 百歳瘡ひやくさいさうとも繒しん豆瘡とうさうあり。六む其形かたちち豆まめ小似ちひさかたればか
 裳瘡ちゆうさうとハ草瘡そうさうの略りやくかりと云。後世追々中華より治方の書渡りて今を
 諸医しよゐと申治方ちほうを得其難易なんゑいを察し。易症ゑいしやうは是を救すくへり。実人じつじん人中にんちゆうの毒瘡
 僧玄助しやうげんすけ乱宮内廣嗣謀殺 廣嗣憤靈殺玄助條
 参議式部卿宇合公の嫡男小太宰小貳藤原廣嗣とい人右々々天平
 十二年縁故ありて筑紫ふ於て亡びたり。其根元そのねもとを尋たづねるふ。當時太后と申。淡海
 公の御女小て宮子媛と申。當今聖の御母君小て在せり。茲ハ太后何

となく脚不豫あしふぞく脚心地あしちま堅かた固こめて敢て人小対面たいめんと申。妻を嫌きらひひひ天白てんぱくと始
 する。官女くわんぬといども御目前みまへ近着ちかづめらむ。典てん案あんの輩はい医案いあんと疑うたがひ。百術ひやくじゆつと
 せども露つゆむらうの験しるしもふくらむ。帝大みかど不患ふゑんひひ。此こゝ六佛法ろくぶつぽうの徳とくをわけて
 脚平愈あしへいゆを祈いのちまはんと思召僧おぼしめしやう正玄助しやうげんすけ其項碩徳きやうしやくとくのまへ高たかくく即ち宮内
 召よれて加持かぢせらる。太后たうてう玄助げんすけを二月脚覽あしをらあつと。快たのししふふ笑わらせせままひ
 脚不例あしふれいも稍しやうおこせり。体てい小ちひえさえせせままふふと。帝みかど中ちゆう太后たうてうの脚あし簾内れんない入い脚あし區
 りひて脚對顔あしたいげんあり。平素へいそ小ちひ変かりり。体ていも在あらず。是こゝ小ちひ依よてて帝みかど玄助げんすけの法徳
 を甚おぶぶ感かんずず。多おほくの賞物しょうぶつを給たまはりり。玄助げんすけ是こゝより日夜にちや太后たうてうの宮内
 相結あひむす脚側あしがは小ちひ忍しのびび追おひひ。脚意あしゐふふ叶あひひ。遂つひ小ちひ恐おそむむ。太后たうてうと枕まくらを並ならぶぶ。女
 官くわん們ら與よりり私語しご令しやうとといいふふ。太后たうてうの脚あし妻めかけを誰たれも露あららわわすす。露あららわわすす。此こゝ義ぎもも内うち外そと小ちひ洩あははささすす。更さらふ
 とも隠かくすす。より頭あたまありあり。とといいふふ。瘡かさのかさ下した。此こゝ義ぎもも内うち外そと小ちひ洩あははささすす。更さらふ

隠きふりたるを藤原廣嗣是をすて大い狭た此頃頻小天変者續ハさる
僻吏を天の咎めり所あるをすて表をとりて政事の得失を論じ天変地
妖の凶兆を述僧玄昉宮中出入と太后と奸婦も亦天下禍乱の基ハ
これ早く玄昉を誅し不法を糾り多と練奏去れども帝ハ御孝心深く
在りて太后の思召の程を悼り夕日具佛乘亦惑ハれり玄昉を信じり
更練を納めり玄昉の不行跡をも咎めりて廣嗣の忠表を定りて置
りて多と薄情有りたるを玄昉斯とすて大い怒り太后廣嗣の吏を散り申
さぬ奏したるを太后御憤り強く帝廣嗣を追退けりを遂にヤさせ
りよより遂に廣嗣を太宰府の都督小貶し筑紫下るべし勅書と冷ひ
たれど廣嗣牙と啗で大い志し良素口お苦く忠言耳お逆ひさるも賢明乃
君も妖僧の毒舌お惑ハされり又浅きさとと腸を燃し心を焦せども倫言

出て多し何れも奈何ともまがて。かなく筑紫下りり多し。筑紫益々冷が。堪ひて
肥前國遠珂郡小城廓を構へ軍兵を召集め都へ攻上つて玄昉を下り誅
戮せんことを企てり。隣國の諸士大い驚れ廣嗣が所存の底を去りて正
謀叛の結構を心得追々京都に注進する。頻波のおが。帝強く逆鱗
を刺し急死廣嗣を誅伐すべしと。從四位上大野東人を大将と。從五位上紀の
飯丸を副将と。軍監軍曹各四人を副られ近國の軍勢次第徴集め都合二万七
千余騎を授けり。加えりて衛門督佐伯常人式部少輔阿部重丸小四平騎
を授けて先陣とせり。斯て諸將都に進發し。天平十二年冬十月上旬肥前
國板櫃小着到。板櫃川を前におて屯と張節度使の大旗其餘家々乃
旌旗を川風不吹靡。一々八縣も目覚しり。廣嗣斯とすて天を仰いで
長歎し。嗚天かろろ。太后ハ我氏族にて朝政を乱さる。厭ハ先妖僧を助と

殊と乱根を絶さんと謀り却致逆人の汚名を蒙り征将と差下さるるを遺恨
 かけられ玉砕けも涙を忘るる竹焼ても節を失はざると縋り今公軍軍
 菟向ひ素意ある昔を陳猶承列せざるを夜く一戦と漢く戦先せん
 軍兵二万余騎を引卒一板櫃川に出張一々官軍の先陣常入虫九雨八
 川の東岸小屯して在るる虫九敵軍の出陣せざらばて自身馬成乗出ぬ
 虫九が其日の軍装小錦華の鎧小銀の星兜を猪首小香なり。鹿毛の駒
 小赤乘重藤の弓檜込で大音小叛逆人廣嗣小言ひ死義ありとれ出られ
 よと呼りられ小應下と廣嗣馬成乗出々々廣嗣其軍装ハ継威乃
 甲小金の鋌形も五枚胃と香三所藤の弓携り黒の駒の太く逞しれ小
 乘宛責の郎黨を左右小従ふ。徐くと馬を立答るるハ我身小とつて叛逆の
 覚ふれども示さる義有とわれ馬成出せり先今度下向あり軍將ハ何人

小や姓名を承りんと問虫九答て曰大將軍大野東人副將軍ハ紀飯九斯
 い我ハ名告ふ及むを佐伯常人と俱小今度の先陣と給りて下向せり。御
 今上小對しなり何の宿意有て。謀殺を企て天子小ら寧んを欲さるや其
 意趣を述べられよといひるる廣嗣答て馬より下り再拜して曰廣嗣ハ心中ハ
 高天也照覽あり也毛頭君小對しなり戈戟を動かさる存念あり。此も
 太后奴僧玄助と奸婦もいひて國の政更と乱朝家の御耻辱方付遺さ
 んと去るを以て我先其乱報さる玄助を除んと忠表とせられも御用ひや
 却て讒舌を信じし廣嗣を遠く筑紫へ貶しむる遺恨あり抑太后ハ
 我も小親しむ伯母公も藤原の氏族も在る。天魔破旬小魁られし
 々ん行迹を汚して天津見屋根命の裔孫も藤原の家系小近土をぬり
 自ら更他聞の鯉り千載の瑕瑾何更し是も如んや。當今もす御名の汚さ

是ハ勝る御吏有がず。然る小代ハ忠臣なる藤原氏を一人の邪端破戒の僧ハ
 見替せしめて。豈聖明の君とすや。偏小佛徒の邪弁小惑ハれも。さう御
 辟使かをもや。依て我己吏を得と軍勢と驅集め都押上り強拵と。の賊
 僧を下下。誅戮と朝家の政道を正しく。まんとおも。此外ハ敢て別
 首趣や。此一言偽リやを天神地祇の罰を蒙る。御辺ハ願ひ。此首と
 奏達し。去助を誅し。より我ハ給る。計らひ。然る我ハ死を給る。甘
 心して刃と受。と高声ハ述べ。れ。虫丸も理りとハ。尚其偽言。おん吏
 を疑ひて。言々ハ。所一應理。あ。似れ。城廓を構。軍勢を驅集
 て隣國を強。と。叛。逆。小。水。と。何。と。や。去。助。一。人。を。誅。せん。と。お。ん。を。幾。度。も。其。首。と
 歎。奏。と。る。み。如。察。と。る。小。周。辺。去。助。を。下。下。と。成。名。と。実。を。君。小。弓。響。ん。の
 所。存。な。る。や。御。と。る。を。甲。冑。之。腕。縛。を。受。て。都。上。り。朝。廷。小。於。て。其。思。言。

を奏せしむ。我徒已ハ勅命と蒙りて下向せ。上ハ手と空りて帰洛せん。は
 御辺を虜せむ。兵馬を動かさざると。凱陣と。と。若。り。云。々。と。廣。嗣。勅。を
 とて大ハ悲。リ。你。が。如。き。聲。と。兎。角。の。向。答。無。益。な。り。支。を。支。て。上。へ。蹴。散。
 て上洛し。賊法師を誅せ。ハ。止。と。言。つ。馬。小。内。と。飛。乘。急。小。軍。卒。下。知。を
 つ。一。齊。小。喊。を。と。と。發。せ。火。速。小。川。を。渡。さん。と。れ。常。人。虫。丸。精。兵。の。射。人
 を。揃。へ。矢。を。射。る。吏。雨。の。ど。廣。嗣。が。勢。此。矢。の。お。射。ま。れ。矢。場。小。七。十。人。射
 落。され。進。と。て。猶。豫。も。官。軍。の。副。將。紀。飯。九。千。余。騎。小。川。上。り。押。渡
 リ。煙。塵。を。蹴。ま。喊。を。發。て。廣。嗣。が。陣。撃。て。く。廣。嗣。是。を。見。て。金。言。弟。の
 綱。千。小。十。余。騎。と。授。け。て。常。人。虫。丸。が。勢。と。防。が。せ。自。身。八。五。千。余。騎。と。得。て。飯。九。が
 勢。小。菟。向。以。俱。小。新。千。を。勢。の。猛。ハ。喚。れ。叫。ん。て。攻。戦。ハ。吏。一。時。を。り。互。小。千。負
 戦。死。殿。々。何。時。果。成。と。も。ん。え。さ。と。と。小。廣。嗣。が。將。胡。古。大。呂。が。手。小

属、もろ太宰史生板櫃小ケ呂凡河内田道の三人俄不及忠一丰勢小下知
及切られた。廣嗣が勢大不殊た須驚変心の者あるごとと半料り前
の敵を支うて強た之廣嗣大不怒激。後の敵と追拂んとこれを前の
敵軍襲ひつるを前を防げむ後より亦立殆んと防戦難義小て一陣移く
と乱さるる是より前廣嗣の舎弟綱手ハ敵軍と矢軍と在る小兒
廣嗣の戦ひ難義かりと中是を救ふとる所小常人虫丸忽ち川を渡して
腹手てうとる小兒を救ふとる。是非なく敵を向火花を散して挑
戦ひつる。然るとも小官軍の惣大将大野東人九十余騎の新手を将く川
を颯とつと。大不喊を發て綱手が隊の横合より蒐まるとも當の敵と
まゝの綱手が勢新手の大軍小打られ隊を七續八断小せれ手負らち
死數をまるとも散々成て敗走とられ綱手も今是までなり。凡廣嗣と生死

なとも小せん。手の者四五十騎を従一方と腹手破て廣嗣陣をさして蒐
れた殘兵乃耻を知る者ハ敵と刺ちてあひハ乱軍の中陣没。言ぐ
まれば己がさか落行又と官軍小降参とももまくり去程小綱手ハ
廣嗣が陣地行るとも小。官軍雲霞のどく八分と取囲と土煙天を曇せ
鯨波山川小響音れ廣嗣が勢ハと困まれ休まれば綱手争擬くと敵
手勢と屬す。嚏と喚て敵軍の中割て入無二無三小難まるとも京軍の
其勇銳小辟易し路を用てと通る。此時廣嗣ハと百五十騎小擊為
まて十重二十重小と困れ一丸旗とかり惡戦ともとる。舎弟綱手敵と
切崩けて弛来りとも小。廣嗣大の力を得兄弟一致小勇と奮ひ旗旗を敵
を難まるとも遂小一條の血路を切用れ兄弟助をあへ本城をさして蒐行んと
する。兩人も乗る馬ハ數刺の戦ひ中矢をまくり負れを四足を折て弱り伏

廣嗣綱手を為方なく歩まかりたる所小田胡古呂三十騎の
の残卒と引徒其身も矢を多く折り大軍未成て荒れ廣嗣只身
向ひ敵軍早本城へ押寄此所へ大勢追来りいど今八脚運の是まで
と覺ひ名もかれ者の手討さむらう。何所なりとも落延の以潔く脚
自害がより其其是く追来る敵を凌止しん言れ廣嗣實も
とは意に綱手と俱小松浦をきてと落行多古呂今八心易くと三千人
斗の疲武者と二隊と追来る敵を待たる程なく官軍の二将河部乃
黒丸三百騎をうけて追きりく小田胡古呂待殺るも更なれを些とも猶
豫いど三十騎一塊不成て敵かろう合死力と尽くと血戦敵數を討取
終小緒卒とも小乱軍の中小戦死する黒丸猶も手勢を励まし廣嗣
が首を得んと松浦を臨んで追行々。諸廣嗣兄弟八松浦の値加嶋とい

所まで到り木深た杜の中へ座せぬ鎧の上帯解き脱捨刀を小拔持ふ
都の方と望んで眼を瞑し我朝家の柱石も藤氏の家嫡と主れ殊更
王家の類族も身ある小個の女僧の絶舌のとも死と龍口原上乃土不
肆し不臣の名を唱らうと遺恨あまらう一命此松下の露と消るとも
一念の靈を陽土小留より玄助が五躰を劈りて止どと誓り終小兄弟相向
ひ刺ちて死する所へ黒丸緒卒とも小馳来り廣嗣は胞が死
亡せしを見て其首を討取本陣へ馳せり大將東人の実檢小備も東人
黒丸が高名を賞美し猶余黨を探り尋て擒み敵の城廓と破却し
て三軍と収め都へ凱陣し勝軍と奏聞し廣嗣兄弟の首を得る上目とのを
これ帝睿感すし軍功を賞美の列将不賞禄と給り任階を進
め廣嗣兄弟の首級を流石御縁族の妻あれを梟首させのふ忍び



玄叟僧正
光世
至り廣嗣
亡吳のまよ
命と

玄叟僧正



廣つゝ亡吳

玄叟僧正

其親族小給り寺院(華らせのひたり)玄昉(ひろか)廣嗣(ひろつぎ)が誅せられんとて
 大(おほ)に怡(よろこ)びます。太后(たうご)の寵(おぼ)遇(ぐ)小(こ)憐(れん)りて。尊(そん)大(だい)の行(ぎやう)条(じょう)増(ぞう)長(ちやう)り。小(こ)ぞ緒(よ)人(ひと)漚(う)吐(た)して
 忌(い)心(しん)惡(あく)口(くち)毎(まい)小(こ)排(はい)撻(たつ)して止(と)まらぬ。帝(てい)も緒(よ)人(ひと)の惡(あく)貌(ぼう)を聞(き)きて
 昏(こ)んを惱(な)す。のひ太后(たうご)小(こ)をのひて玄(げん)昉(ぱう)を太(たい)宰(さい)府(ふ)の觀(くわん)音(おん)寺(じ)の別(べつ)當(たう)小(こ)任(にん)也(や)。皆(みな)ら
 筑(つく)紫(し)下(げ)向(むか)せり。のひはる。是(こゝろ)小(こ)依(よ)て玄(げん)昉(ぱう)已(い)更(ま)を得(え)ず。其(こゝろ)後(ご)弟(てい)と從(ま)りて
 乘(ま)騎(き)小(こ)お乘(ま)行(ぎやう)装(さう)美(み)く。筑(つく)紫(し)下(げ)を。太(たい)宰(さい)府(ふ)著(ちやく)て觀(くわん)音(おん)寺(じ)小(こ)入(に)翌(よ)日(にち)
 觀(くわん)音(おん)堂(だう)結(むす)人(ひと)と立(た)出(で)る。小(こ)俄(ゑ)然(ぜん)二(に)天(てん)久(く)曇(曇)り。一(ひと)朶(た)の黑(くろ)雲(うん)ま(ま)以(も)降(ふ)る。よと
 々々(とと)が雲(うん)中(ちゆう)より廣(ひろ)嗣(つぎ)の亡(な)靈(れい)在(あ)り。かゝる甲(か)冑(ごう)姿(すがた)を現(あら)われ憤(ふん)怒(ど)の面(めん)心(しん)を
 小(こ)勿(な)ち玄(げん)昉(ぱう)を執(と)り提(た)て虚(こ)空(くう)飛(と)騰(たう)り。徒(と)弟(てい)們(めん)大(だい)小(こ)孩(がい)死(し)戦(せん)慄(りつ)
 死(し)皆(みな)宿(しゆく)坊(ぼう)と逃(にげ)歸(かへ)る。其(こゝろ)後(ご)與(よ)福(ふく)寺(じ)の唐(たう)院(えん)夜(や)中(ちゆう)小(こ)凄(せい)しく鳴(な)響(きやう)音(おん)て大(だい)地(ち)呻(う)と
 落(お)る物(もの)あり。る。史(し)衆(しゆう)徒(と)怪(かい)しく集(あ)りて是(こゝろ)を。後(ご)小(こ)を。あぬ。玄(げん)

昉(ぱう)生(な)首(くび)小(こ)血(ち)泣(な)淋(りん)瀝(れき)とま。り。小(こ)を。衆(しゆう)徒(と)們(めん)大(だい)小(こ)孩(がい)死(し)是(こゝろ)廣(ひろ)嗣(つぎ)の惡(あく)靈(れい)の
 所(しよ)為(な)り。下(げ)と古(こ)と。り。て。怕(お)合(あ)斯(し)と朝(てう)廷(てい)松(しょう)へ。其(こゝろ)以後(い)後(ご)廣(ひろ)嗣(つぎ)の憤(ふん)靈(れい)並(び)
 百(ひやく)般(ぱん)崇(しゆう)と。り。或(ある)空(くう)中(ちゆう)小(こ)大(だい)か。鏡(かみ)飛(と)り。其(こゝろ)光(ひかり)凄(せい)しく。是(こゝろ)と見(み)る者(もの)悉(ことごと)く
 大(だい)熱(ねつ)病(びやう)を患(わづ)る。者(もの)大(だい)小(こ)憂(う)怖(お)ま。る。帝(てい)も此(こゝろ)由(よし)南(なん)食(じき)て深(ふか)く恐(おそ)怖(おそ)り。玉(たま)
 て松(しょう)浦(うら)の御(ご)小(こ)社(しゃ)を建(た)て廣(ひろ)嗣(つぎ)の惡(あく)靈(れい)を神(かみ)と鎮(ちん)め祭(まつ)り。其(こゝろ)憤(ふん)り。と者(もの)のひ
 松(しょう)浦(うら)の鏡(かみ)の宮(みや)り。小(こ)は。是(こゝろ)を。り。と。や
 傳(でん)小(こ)曰(い)僧(そう)玄(げん)昉(ぱう)俗(ぞく)姓(せい)阿(あ)加(か)氏(し)を。初(はつ)め義(ぎ)淵(えん)僧(そう)正(せい)の徒(と)弟(てい)と。り。て唯(ただ)織(お)織(お)論(ろん)を
 學(まな)び。元(げん)正(せい)天(てん)皇(こう)の靈(れい)並(び)龜(き)年(ねん)中(ちゆう)小(こ)入(に)唐(たう)へ。法(ぽう)法(ぽう)を。學(まな)び。小(こ)お。玄(げん)宗(そう)帝(てい)玄(げん)昉(ぱう)を。尊(そん)
 びて。三(さん)日(にち)小(こ)準(じゆん)して。此(こゝろ)の袈(け)沙(さ)衣(い)を。賜(たま)ひ。玄(げん)昉(ぱう)在(あ)り。唐(たう)へ。更(ま)十九(じゅう)年(ねん)あり。聖(せい)
 武(む)天(てん)皇(こう)の御(ご)小(こ)歸(き)朝(てう)へ。經(きやう)論(ろん)五(ご)十(じゆ)余(あ)卷(まき)並(び)小(こ)諸(しよ)の佛(ぶつ)像(ざう)を。費(ひ)歸(き)りて。帝(てい)獻(けん)上(じやう)
 一(ひと)る。も。帝(てい)玄(げん)昉(ぱう)を。御(ご)信(しん)仰(やう)あり。僧(そう)正(せい)小(こ)住(ぢゆう)紫(し)衣(い)を。賜(たま)ひ。禁(きん)中(ちゆう)の内(ない)道(だう)場(ばう)

小住しりあひり。又玄助遂に後宮不出して太后小媚縮ひ恩寵を蒙りたり
 曾て玄助唐亦存りたり或異人玄助の人相をみて你が面部小悪相あり又
 玄助の字音六還亡るの音あり。日本へ還るを必と亡去す。不如水く唐
 土小田とよと宛示されむ。玄助其言甚は心頭ふけて愁ひ多る。日本を
 慕ひ情禁じ難く。遂に帰朝と禍を遭りと知り。然も心も此宛常と
 玄助が横難を遭ひ八相類す。六名の字音子因とよ。亦有る。只令唐亦
 通るとの僧の身とて高貴の君と奸婦と忠臣と宛害せむ何ぞ禍其身小
 及む。一は身を慎む徳を脩めむ。日本へ還るも禍ひを遭む。玄助が
 禍を遭ひ八已と招くとよ。わて。自業自得と云ふる而已

扶桑皇統記前篇卷之三畢

名古屋 大曾根 矢野平兵衛藏版之内狂俳書目

狂俳玉柏	七冊	浦浪集	二冊	五撰集	一冊
同太著集	五冊	末廣集	二冊	秀志路集	一冊
同續太著集	一冊	苗代集	二冊	登賢惠里集	一冊
類題花の魁	七冊	六のち樽	二冊	嘉賀美具佐	一冊
花むしり	五冊	千代見	一冊	鐵夕々海下	一冊
三日月集	四冊	田植うゑ	一冊	吳竹集	一冊
愛知土産	二冊	清蘭集	二冊	花供養	一冊
多年富勺部	五冊	八重垣集	一冊	樂美集	一冊
増のしるゑ	四冊	名古屋扇	一冊	百人集	一冊

